越前松平家家譜　慶永　4

一　明治元年一月～三月

（表紙）
「家譜　慶永公　従明治元年正月　到同年三月　二百十巻之追加　一」

慶応四年戊辰

一正月元旦益御機嫌能於京都岡崎邸、御超歳被遊候

但御目覚之節御二之間江被為出、御吉例之通御年男長谷川友次郎罷出居、御扇子被下之

一数御熨斗・御雑煮・御吸物・屠蘇・御取肴、御祝御小姓頭取并御小姓役之

一右被為済御膳後、御家老本多修理、続而御中老・御用人罷出御祝詞申上、九時過御側向頭取始奥向一同、御医師等御祝詞申上之

但当御時態ニ付奥向之者而已上下着御祝詞申上、表方之者ハ年頭之御式無之、御屋形勤之者も元日而已夕七時限り上下着用候事

一同日参朝御断り、御家老本多修理を名代として御祝詞被仰上之

一同日御所より御達之御書付左之通

御用之儀有之候間、明二日巳之刻九条家江参集可有之事

但四脚門往返之事

追而総裁宮依服中、宮中御神事中御参朝難被成ニ付、被用九条家候事

正月一日

越前大蔵大輔殿

一正月二日巳ノ刻出門、九条家江参集せらる、昨日御達の旨ありし故なり、此日は外国に対する所置方を議せらるゝため特に集会せられ、夫是御詮議中、夕七ツ時過伊藤友四郎急に参上して内啓せしハ、今日大垣藩小原仁兵衛に面接せしに一昨晦日夜浪華に於て内府様近々御上京あるへきを以て、御先勢として追々人数を繰出さるへし、就てハ諸藩よりも大坂駐在の人数を指出たし、御先勢中江加ハるへしと達せられ、即昨朔日より出勢せらるゝ由なるか、是ハ其実専ら伐薩の為めと聞之、事の体以ての外穏ならさる趣、同藩大坂在留の士より報知せしを以て、此節がらさる挙動に及ハるゝハ極めて御失策と存せし故、直ちに井田五蔵を大坂に下たし誠意の在る所を建言せしめたれと、到底井田一人の力のミにては行届かさるへし、されと此事を慶永公に申上何とか御考量を希ひたく思ひ居る場合なりと申聞けし故、取あへす参上せりとの事なりし、慶永公此事を聞き大に驚かれ、夫是考案中、下院詰合参与の方々申合ハされ、此上なから慶永公より抑止せらるゝ外あるへからすと申出られし故、公俄かに所労を申立帰館せられ、宇和島老侯・尾張老侯代成瀬隼人正・戸田大和守殿に来邸を請ひ、外ニ肥後藩溝口孤雲・津藩藤堂帰雲・土藩後藤象次郎[二]を招き寄せ協議

の上、本藩よりハ中根雪江、津藩よりハ藤堂帰雲、肥後藩よりハ溝口孤雲、土州藩よりハ深尾鼎、外ニ尾張藩よりも一人速に下坂諫争する事に決せられたり、かくて来邸せられし方々の退散せられしは翌三日暁寅刻なりき

一正月三日中根雪江大坂に出発す、昨夜の決議により徳川内府殿に出勢を思ひ止まらるゝ様諫争するため、下坂せしめられしなり

一同日午刻御所より御使を以て左の通達せらる

自昨日至今暁坂兵遂ニ伏見表江出張、其実如何難斗候得共何分不容易形勢ニ付、早々参朝可有之総裁宮御沙汰候事

正月三日

越前大蔵大輔殿

追而参与召連早々参朝可有之事

一同日再御所より御使を以て左之通達せらる

尾張大納言

越前大蔵大輔

昨日より今暁に至り坂兵戎服大砲相携追々伏見表出張之趣、如何之儀ニ有之候哉不容易進退、其儘難指置ハ勿論ニ候得共、猶前々周旋之筋も有之、旁右人数早々引払候様取斗可致、若不奉命候へ者不得止之場合ニ付、為朝敵ヲ以御所置可被為在候事

正月三日

一同日薄暮出門参朝せらる、午後早々参朝せらるゝ筈なりしも、坂兵を抑止するため土州老侯・宇和島老侯に来邸を請ひ（土老侯ハ所労来られず）外に土藩神山左太衛・芸藩辻将曹を呼ヒ迎へ、此席江梅沢孫太郎を招き慶永公より説諭せらるゝ所あり、夫か為め大に時間を費され遂に薄暮に至りしなり、さて此日梅沢に説諭せられし大意ハ、伏見の形勢頗る切迫のよし、此節から戎器を携へ出京する如きハ甚しき失体なり、されは早々坂兵を諭し大坂に引返す様取斗ハるへし云々申聞けられしに、梅沢内府公より厳敷御下知ある事なれは、決して兵端を開らく様の事ハあらさるへしと答へし故、公更に事の体中々容易ならさるよしに聞及ひたり、万一坂兵より発砲する様の事あらは、名義忽ち地を換へ内府公の御身上に如何なる汚辱を蒙らるゝやも測りかたし云々説得せられしかと、梅沢名義ハ既往に至りて立ものなれは、内府公入京奸人を芟除せられなは、名義ハ如何様にもたつへきなりと強弁せし故、其席に在し人々一同其迂闊なるに驚き、辻将曹・酒井十之丞・毛受鹿之介等堪り兼、代る〳〵厳談に及ひしも梅沢終に落意に至らす、夫か為め追々時刻を移し、已に薄暮近くなりし頃伏見の方位に当り失火ありと報せし故、公大に落胆、事已に去れりとありて大息せられ、列席の方々も一同驚嘆せしか、梅沢尚頑然失火にハあらさるへしと申居りし故、公三階に登りて遠望せられしに炎煙天を衝、炮声地を動

かし、紛るゝ方なく兵燹と見へし故、列席の人々をも呼ひて遠望せしめられしに、梅沢始めて茫然何の言もなく呆痴の如き体にて退去せり、此日薄暮に迫りて慶永公参朝（予老侯ハ御相談未た畢らさる已前参朝せられたりせられけれと、朝堂にハ有栖川帥宮・山階宮・仁和寺宮を始、中山大納言殿以下諸卿及ひ尾老侯・予老侯・芸若侯等列席せられし故、慶永公其席へ出、過般来精々坂兵の鎮撫に従事しけれと、遂に今日の次第に立至り、朝廷に対し申上へき辞もなく恐縮せり、畢竟微力の致す所慙愧に堪へす、此上ハ即時に本職御取揚け、斧鉞の御厳譴を蒙るへき覚悟なりと中山卿へ申立られ、退座後尚又書面をも指出されたり、左の如し

唯今伏見表及兵争候趣承り候、兼而私共江尽力之儀被仰付置候処無其詮、今日之場合ニ至候義全尽力不行届故と重々奉恐入候、此上早速御役御免被成下候様奉嘆願候、然る上ハ如何様ニ御譴責被仰付候共謹而奉甘受候

正月　　越前宰相

一同日尾老侯にも成瀬隼人正を以て慶永公同様辞職申出られ、土・予・芸三侯にも辞職を申出られしよしなるか、此辞表ハ追て聞召されさる旨御沙汰ありて事済たり

一同日夜に入て朝廷より尾張老侯・慶永公へ左の通り達せらる

尾張大納言　　越前大蔵大輔

大政復古ニ付而者御沙汰之趣も有之、去月来出格尽力之次第神妙之至ニ被思召候、然ル処今暁来伏見表之事件不容易模様ニ押移、最早万不得止形勢ニ付、此上ハ多年勤王之旨趣弥勉励、禁闕警衛可有之被仰出候事

正月

追而思召之儀も有之候間、若人数不足候はゝ早々国元より繰出候様御沙汰候事

一同日薄暮以来、伏見・鳥羽の両街道に於て劇戦ありとの報追々宮中に達し、且其方位に当り火光天を焦し炮声地を動かすに至りしかは、宮中俄に戒厳仰出され、諸藩の兵を召して禁闕内外の警衛に宛てられしか、公卿方には動揺殊に甚しく、鳳輦を叡山に遷幸なし奉るへしとの議を発せられ、已に御板輿を庭上に舁居ゑ、尾・越二藩江御警衛を奉仕すへしとの内命を伝へらるゝ抔、以の外なる次第なりし故、慶永公深く大早計に駭かれ、宇和島老侯と共に山階宮へ決して御動坐なと在らせらるへき場合にあらさる旨を申上られ、辛くして御遷幸の議を取消されたり、かくて今夜仁和寺宮江軍事総裁、東久世少将殿・烏丸侍従殿江参謀仰出され、猶又土老侯江軍事副将、慶永公・宇和島老侯・芸若侯江軍事参謀を宮より御依嘱ありしか、土老侯以下何れの方々も固辞せられたり

一正月四日暁大坂に於て東町奉行役所江同所知邸を召喚し、両町奉行列席左之通り達せらる、是ハ城内に於て大目付衆達せらるゝ筈なれと、夜中混雑故町奉行役宅にて達せられしものゝよし、知邸代岡本晋太郎出席せり

先般建言之次第も有之処、豈料や松平修理大夫妄擁幼帝、不尽公議、矯叡慮、天下之乱階を醸し候件々不暇枚挙、依之別紙両通之奏聞を遂ケ、大義ニ依テ君側之悪ヲ払候ニ付、速ニ馳集軍列ニ可相加者也

奏聞書

臣慶喜謹テ去月九日以来之御事件を奉恐察候得者、一々朝廷之御真意ニ無之、全く松平修理大夫奸臣共陰謀ゟ出候者天下之共ニ所知、殊ニ江戸・長崎・野州・相州所々乱妨ニ及、劫盗候も同家家来之唱導ニより東西響応シ、皇国を乱り候所業別紙之通ニ而、天下共ニ所憎ニ御座候間、前文之奸臣共御渡御坐候様御沙汰被下度、万一御採用不相成候ハヽ不得止誅戮を加へ可申、此段謹而奉奏聞候

正月　　慶喜

別紙

薩藩奸党之者罪状之事

一大事件尽衆議と被仰出処、去月九日突然非常御改革を口実とし、奉侮幼帝御所置、私論を主張候事

一主上御幼冲之折柄、先帝御依托被為在候摂政殿下を廃止参内候事

一私意を以宮堂上方を恣ニ黜陟せしむる事

一九門其外御警衛と唱へ、他藩之者を煽動し兵杖を以て宮闕に迫り候条、不憚朝廷大不敬之事

一家来共浮浪之徒を語合、屋敷屯集、江戸市中押込強盗致し、酒井左衛門尉人数屯処へ砲発、其他野州・相州処々焼討劫盗ニ及候者証跡分明ニ有之候事

〆

一正月五日暁奈良元作福井に出発す、一昨三日以来の形勢を報せらるゝため出発せしめられしなり、元作江御渡之御直書左の如し

旧臘九日以来、従朝廷内府公江御内沙汰之儀ニ付、不及なから軽生不容易尽力いたし、尚御下坂ニ付而も粉骨砕身、其後従朝廷御沙汰被為在候ニ付、廿五日下澱、華城へ罷出、内府公江言上、御請相成候故晦日帰京、直ニ復命も致、其上追々骨折、何卒御上洛御参朝迄も尽力、次第ニ順境ニ相運、朝廷向も御都合宜相成様子之処、去る廿五日江戸表騒乱之儀相聞へ、華城旗下之士生大沸騰候様子ニ而、俄ニ御上洛之風聞会・桑等先鋒ニ而伏見迄上り来り、就夫も一昨日ゟ十分之尽力致シ、雪江も下坂申付候位之処、昨三日夕ゟ伏見兵火起り、遂ニ干戈動き候形勢ニ而不容易御大事、已ニ喪乱ニ及ひ申候、右ニ付昨夕参朝致し帥宮御初、議定・参与列席江罷出、是迄不及なから以不肖尽力

仕候処、遂ニ今日之喪乱ニ相成候、全ク慶永尽力之不行届之故と奉恐入候ニ付而ハ、議定職奉辞、其上如何様之御譴責相蒙候共奉甘受候旨御直ニ言上仕、書付も指出候、右之趣意ニ而何分ニも辞職勅許奉懇願候旨、此上願出候事ニ而最早世人江も面目無之、迚も相勤候所存毛頭無之事ニ寄候得者、所労ニも有之、旁様子見斗御暇も願出候積りニ候、此段国許江早々罷帰り越前守江可申聞事

正月四日　　慶永

一同日暮時中根雪江大坂より帰着す、昨四日暁着坂して大坂城にいたりけれと、途中にて已に伏見開戦の炮声を聞きたる程の事故、坂兵抑止の事ハ最早施すへき方便なく空しく帰京せしなり、大坂に於て内府公より尾・越以下六家宛の御直書を渡されたり、如左

奏聞之次第ハ有之候得共、輦轂之下ニ於て干戈を不動様兼而兵隊之者共へ申諭置候得共、彼ゟ已ニ炮発之上ハ此上之形勢心配致候間、呉々も鳳輦守護被致候儀厚く御頼申候、以上

正月四日八字認　　慶喜

尾州　越前　土州
細川　芸州　宇和島　殿

一正月六日京師下立売御門より寺町御門に至る間にある公卿方の邸宅家十四江警衛人数を指出さるへき旨達せらる、是ハ九門内公卿方邸宅穴門有之分不残三十四家江警衛人数指出すへき旨達せられけれと、在京の兵士少数なりし故其旨を申出られ、十四家江差出さるゝ事となれるなり

一同日飛信を以て茂昭公江御直書を進せらる、是ハ京師の形勢容易ならさる事となりし故、在国の輩万一疑惑する事あるへきかとて、予しめ公の内旨を伝へられしなり、左の如し

方今之形勢不容易、干戈頻りニ動き、皇国之安危ハ勿論、宗家之存亡此秋ニ迫り、実ニ苦心難堪、日夜令悩慮候、昨朝奈良元作を以三日以来之景況申達候後、浪華より中根雪江書状到来、且従内府公御奏聞書并列藩之御布告相廻り拝見致候、右者乍恐御尤之御趣意之様ニハ候得共、全体従公辺兵隊御指登せ、其外御不都合之廉々も不少、間然なしと難申、従朝廷之御所置御命令も可議なきに非す、臣子之身分恐多き事なから憤思ニ堪兼候義も不少、唯今之形勢ニ而者如何とも不可成、矢張元作を以申達候所存ニ而、幾重ニも尽力不行届之所を以辞職御譴責奉懇願之外無之覚悟ニ候間、於国許、公辺御布告等之儀ニ付万一議論鼎沸致候共、此地之景況不解惑より畢竟事起り候故、我等之所存如此候得者、足下之進退も亦天下之公論を被待、至当之所置有之度、只今之処万一不都合ニ而ハ千載之笑ト存候、此趣議論申出候者有之候ハヽ、直諭鎮定尤ニ候、右之趣及陳啓候也

正月六日　　大蔵大輔

越前守殿

一正月七日徳川家へ征討軍を指向けらるゝ事となりし次第を布達せらる、此日ハ議定・参与及在京諸侯に参内仰せ出されしか、慶永公所労、本多修理を名代として参内せしめらる、小御所に於て帥宮御読渡の御達書如左

徳川慶喜天下之形勢不得止を察シ、大政返上将軍職辞退相願候ニ付、朝議之上断然被聞召候処、只大政返上ト申而已ニ而、於朝廷土地人民御保チ不被遊候而ハ御聖業難被為立候ニ付、尾・越二藩ヲ以其実効御訊問被遊候節、於慶喜者畏入候得共、麾下并会・桑之者共承服不仕、万一暴挙可仕哉も難斗ニ付、只管鎮定ニ尽力仕居候旨尾・越ゟ及言上候間、朝廷ニ者慶喜真ニ恭順ヲ尽候様被思食、既往之罪不被為問、寛大之御所置被仰付へき之処、豈図らんや大坂城江引取候者素ゟ之詐謀ニ而、去ル三日麾下之者ヲ引率シ、剰前ニ御暇被遣候会・桑を先鋒とし、闕下を奉犯候勢、現在彼ゟ兵端を開候上ハ慶喜反状明白、始終奉欺朝廷候段大逆無道、最早於朝廷御宥恕之道も絶果、不被為得止追討被仰付候、兵端已ニ相開候上ハ速ニ賊徒御平治、万民塗炭之苦を被為救度叡慮ニ候間、今般仁和寺宮征討将軍ニ被命候ニ付而ハ、是迄偸安怠惰ニ打過キ或ハ両端を抱キ候者ハ勿論、仮令賊徒ニ随候譜代臣下者たりとも、悔悟憤発為国家尽忠候志有之輩ハ、寛大之思食ニ而御採用被為在候、依戦功此行末徳川家之儀ニ付歎願之義も候得者、其筋ニより御許容可有之候、然ルニ此時節ニ至り不弁大義賊徒と謀ヲ通シ、或ハ潜伏為致候者ハ、朝敵同様可被処厳刑候間、心得違無之様可致事

但征討将軍を被置候上ハ、即時前件号令可被発ハ勿論ニ候得共、猶麾下粗暴之徒壅蔽爰ニ至り候事哉と、彼是深重之思召を以御遅延之処、三日より今七日ニ至り坂兵日々雖敗走益出兵呉々不被得止、断然本文之通被仰出候、各藩陪臣士卒ニ至ル迄方向を定め、為天下奉公可有之事

一正月八日昨日帥宮より御達之御書付ニ対シ御請書を被指出、如左

昨七日所労ニ付為名代本多修理参朝仕候処、御書付を以御達之趣奉拝承候

正月八日　　松平大蔵大輔

一同日夜ニ入、本藩酒井与三左衛門、尾藩成瀬隼人正と共ニ参朝、徳川内府殿より倚頼ありし奏聞書を議定方江指出さる、此奏聞書ハ昨七日大坂城ニ於て御目付妻木多宮より岡本晋太郎に托せしを本日晋太郎携帯出京せしなり、奏聞書并ニ尾・越両家に宛たる副書左の如し

奏聞書

此度上京先供途中偶然之行違ゟ近畿騒然ニ及候段、不得止場合ニ而、素奉対天朝他心無之段ハ兼而御諒知之通ニ候、併聊たり

共奉悩宸襟候段恐入候儀ニ付、浪華城ハ尾張大納言・松平大蔵大輔江相托し、謹而東退仕候、以上

正月　　慶喜

副書

此度上京先供途中偶然之行違ゟ近畿騒然ニ及候段、不得止之場合ニ而、素奉対天朝他心無之段者兼而御諒知之通ニ候、併聊たり共奉悩宸襟候段恐入候儀ニ付、謹而浪華城各江相預、退去帰東ニ及候間、右之趣可然御執成、御奏聞有之度頼存候

正月七日　　慶喜

尾張大納言殿

松平大蔵大輔殿

一正月九日酒井与三左衛門を宮中江差出さる、重臣壱人可被差出旨御達ありし故なり、徳大寺大納言殿謁見、御達之御書付如左

尾張大納言

越前宰相

慶喜東帰ニ付言上之趣被聞召候、将軍宮御進軍華城を以可為御本陣被仰出候間、両藩共ニ迅速下坂、城中点検可奉迎旨御沙汰候事

但若及遅々候而ハ甚以御不都合ニ付、呉々速ニ下坂可致事

一同日更に議定職仰出さる、本日参内仰出されけれと、所労ニ付酒井与三左衛門を名代として参上せしめられたり、徳大寺大納言殿御達如左

越前宰相

先達而ゟ所労ニ付議定職辞退嘆願之儀不被聞食、今度更ニ被仰付候間、此段可被心得候

但華城出張中、御役前相勤候儀御用捨相成候事

右御請書ハ即日御家老代宇都宮勘解由を以て被指出

一同日浪華城点検且将軍宮奉迎として御家老以下役々を大坂に遣ハさる、慶永公下坂の筈なりしも所労中故下坂せられす、此日尾藩よりも御名代渡辺対馬守以下を大坂に遣はされしなり、大坂差遣人名如左

本藩

酒井与三左衛門　　青山小三郎　　小栗五郎太夫

外ニ作事方数名

尾藩

渡辺対馬守　　大沢武五郎　　中村修之進　　梶川橘介

〆

一正月十日御側向頭取中根新左衛門福井より京師に着す、茂昭公より慶永公の御機嫌を窺ハるゝ為め、特に出京を命せられしなり、此時茂昭公より御家老始末々の者まて御酒肴を賜ハりたり

一正月十二日午半刻出門衣冠参内せらる、召命ありし故なり、於小御所被拝竜顔、御前ニ於て総裁宮御渡之御書付如左

越前大蔵大輔

国家多難之砌応召登京朝議之旨速ニ奉行、彼是周旋遂ニ使王道復前古候段叡感不斜候、愈以励忠志可為皇室之維城旨御沙汰候事

一同日夕方中根新左衛門京師を発し福井に帰る、此時慶永公より茂昭公江進せられし御直書如左

去ル三日以来未曾有之喪乱ニより、於国元家老始下々ニ至迄我等を案労シ、追々役人共差登せ候儀、実ニ我等之幸福感涙数行ニ及候、我等決死罷在候故、聊も無障動健食致候間、此趣家老始諸士江も可被申伝候、別而方今天下困難之時ニ候へは、家老始役人共尚為国家自愛候様可被申聞候、唯希くハ何れも此上士気憤興偸安之風習一洗信義之俗ト成り、倫常を守り富強専一執れも勉強可有之、此趣一同江も可被諭候也

正月十二日　　慶永

越前少将殿

此趣家老江も一見可有之、尚心付之品々不拘貴賤言上可有之候也

一正月十三日暁第二時頃突然胃疼症発動、胸部御壅塞、精神御昏濛、一時ハ人事御不省の御容体に被為渉、侍医薬餌調進、第四時頃始めて神気稍御回復に被為至

一正月十四日酒井十之丞・大井弥十郎に、北陸道鎮撫使下向之際越前国内を案内すへき旨命せらる、是者高倉三位殿・四条大夫殿北陸道之鎮撫となられ依頼せられし故なり

一同日福井町人多田善四郎以下十名より、慶永公之御機嫌伺として蒲鉾百枚献上之人名如左

福井町

多田善四郎　井上七兵衛　山口彦三郎
山田五右衛門　竹内五兵衛　駒屋善右衛門
荒木祐右衛門　山田第五郎　山田又左衛門
山田宗左衛門

一正月十六日夕村田巳三郎京師を発し福井に帰る、慶永公の国事に関する意見ハ、宗家徳川氏と共に皇室を奉戴し治安を永遠に保続するを以て第一の定議とせられ、随て一藩の人士に於けるも、挙て其定議に基き休戚共に此範囲を出る事なかりしか、去る三日已来大勢一変して今ハ宗家を推して共に国事に尽力せらるへき世態（マヽ）らすす、故に今後ハ朝廷に立ち正大の公議を持し、専ら国運の挽

回に尽力せらるへきなりとて、其次第を茂昭公に被仰進、且藩士一同江も指示さるゝ為め特に村田を差遣せられしなり、此時村田に携帯せしめられし御趣意書如左

徳川御家之儀ハ異他之御由緒たる事ハ承知之通ニ而候、御休戚御一致被遊候者勿論之処、御衰運之秋にも候哉、今般一朝にして御東下不可為御時態ニ押移候条、何共御痛嘆至極思召候、是上ハ報国尽忠、共ニ御宗家を被為推候義国家之定議ニ候得共、方今と相成候而者王政一新之折柄と申、旁以直チニ東照宮之御遺志御奉戴、追々被仰出候大中至正之公議を以、皇運挽回之王道ニ御尽力被為在候思召ニ候間、一統其旨を存し御奉公可仕旨被仰出候

一正月十七日内国事務総督仰出さる、召喚ありし故参内せらるへき筈なりしか、所労ニ付為御名代伊藤友四郎を被指出、宮中に於て議定長谷三位殿御直達の御書付如左

越前大蔵大輔

内国事務総督被仰付候事

一正月十九日午半刻出門参内せらる、主上御元服の御歓且昨日職務を仰出されし故、御請を申上られしなり

一同日酒井十之丞に北陸道鎮撫使指添として越前国江可罷越旨命せらる、鎮撫使両卿明廿日京師を出発せらるゝを以てなり、此時酒井参与を辞退せり

一同日北陸道鎮撫使高倉・四条両卿江左の通進せらる

高倉三位殿江　国製元込手銃壱挺

四条大夫殿江　同上

外ニ両卿家司・用人江左の通り被遣

家司三人江　ケツト二枚ツヽ銀拾枚ツヽ

用人三人江　ケツト二枚ツヽ銀五枚ツヽ

一同日宮中に於て岩倉殿御直達の御書付左の如し

内国事務総督

京畿庶務及諸国水陸・運輸・駅路・関市・都城・港口・鎮台・市尹之事ヲ督ス

一同日青山小三郎・大井弥十郎に左の通り命せらる

青山小三郎

御勤役頭取・御中老勤向助被仰付之

大井弥十郎

鎮撫使御発向ニ付御国表江出立被仰付之

一正月廿四日於会計裁判所、左之通り達せらる

越前江

思召有之金壱万五千両被下候事

一正月廿六日在江戸前橋侯江直書を被進、是ハ過日来征討軍東下にハ相成候得とも、此上なから徳川家謝罪之真情顕著候はゝ、宗社血食ハ必す相違あるへからさる旨岩倉殿指示されし故なり（此書面廿四日に認められけれと諸般の取調事ありて飛脚ハ本日出発せり）左の如し

密翰致拝啓候云々、此度宗家傾頽之一条御同然恐縮血涙之至、朝廷之御赫怒も御当然ノ御次第御坐候故、其際ニ於て可奉救援道路も無之当惑心痛而已、心ならす在廷之処、昨日岩倉前中将ゟ内談有之候ハ、中将家来昨日関東ゟ罷帰り申達候趣ニ而ハ、錦地も殊之外御混乱ニ而、旗本落合不申候、依是貴兄大ニ御奮発ニ而、廃立謝罪之御主張有之由、方今為御征伐逐々大兵被指向御手配有之候得共、自然右等之正議行はれ謝罪之道相立候得者、国内ハ不及兵乱、生民之塗炭も無之、朝廷へ被対大忠盛勲無此上候得者、何卒愈御主張ニ而謝罪之筋相立候様御尽力之程拙子ゟ及陳啓、御示合申様ニハ相成間敷哉との事ニ候、尤何とか御謝罪之道相立候様、内国之動乱相止候様致度と申ハ此表之輿論にて、於拙子も元ゟ同論、別而慶喜公ニ者無比之御懇命も相蒙候事故、宗家と申御一身之儀も昼夜案労致居候得共、愁成儀及発言候而ハ却而御為ニ不相成時節ニ付、胸をさすり黙止罷在候処、中将より内談之趣ニ而ハ先ツ朝廷より無事を御好ミ之御淵底と奉察候得者、此秋ニ当り貴兄ニも一層御憤激有之、為皇国、為宗家、為生民干戈を止め、社稷を被存候様御尽力之様、於拙子も御依頼懇祈致候、此時ニ於て慶喜公御憤懣之御胸中ハ万々拝察候得共、何分形迹上之御過失今更可奉弥縫様無之形勢ニ候得者、唯今ト相成候而ハ、乍恐何事も御一身ニ御引受被遊候而、天下生霊之為ニ御謝罪之道を被為立候様、所仰冀御座候、方今天下之治乱ハ唯御一心之御所向ニより候事ニ候処、天下之動乱も生霊之困苦も御貪着無之、只管無形之御前議御押張御抗命之姿ニ被成御座候而ハ、御暴逆と申上候ゟ外無御座御次第ニ候得者、是等之御筋合十分御会得被為在、判然御悔悟ニ而御反正之御所置も被行、御伏罪ニ而朝廷之降命を被為待候様無御坐候半而ハ、被対御祖宗御済不被成御儀ニ候得者、呉々此辺御徹底相成候様御鼎力之程所希望ニ御座候、其上ニ而御社稷之儀ハ和宮様ゟ御願之事ニ相成候ハヽ、天下之公議も有之候得者、いつれに御不当之儀ハ無之道理ニ候得者、其辺ハ猶更公議ニ被為任、御未練ケ間敷御願等ハ無御座方御敬上之御趣意も相立、却而公議之為ニも可然歟と奉考察候、尾・紀始於此表成丈申談、夫々之手続次第周旋心力を尽し候筈ニ御座候間、於錦地亦夫々被仰談御運ニも可相成哉、何分兎も角も御興廃之御場合ニ候得者、御精々之処御尽力御坐候様偏ニ以御依頼申上候、已ニ問罪之勅使御発遣之朝議も有之候得者、其以前ニ御運ひ付候得者重畳之御都合と存候事ニ御座候、尚家来中根雪江ゟ御家老山田太

郎右衛門迄申越候次第も御座候得者、御聞取御参考之上唯々偏
ニ為宗家御粉骨千祈万禱之至御坐候、恐々謹言

正月廿四日

一同時に中根雪江ゟ山田太郎右衛門江差越内書如左

上略、御宗家之御儀なから、此節被対朝廷御恐縮之御次第ニ付
是迄御黙止之処、昨日岩倉卿より極御内談有之趣ハ、岩倉卿御
家来一昨日錦地ゟ罷帰申達候趣ハ、御東下後都下殊之外混雑ニ
而、旗本も更ニ落合不申、中々函碓両関を鎖し割拠ト申勢ニも
至り兼候形勢之処、尊藩并ニ江川家ニ於テ、元内府公を廃し、
和宮様御願も有之、旁田府公を立、社稷之保存を御謀被成候ニ
付、旗本も七分通りハ御左袒申上候事之由、就中賢兄随而柏木
氏御奮発御主張之旨相聞候由、此表ニ而ハ、大坂城御明退キ後
彼是旬余ニ及候得共、御謝罪之廉も不相顕候ニ付、追々追討使
代り鎮撫使も被差立、猶薩兵三万二千斗、長兵四十八大隊海陸
ゟ被差向御手筈ニも相成候由、右様之御運ニ而、次第ニ時機切
迫ニ及候得者、実ニ皇国之大乱共相成、双方幾多之人命ニも相
拘り、且者生民之塗炭無申計場合ニも可立至運ひニ有之、然ル
処錦地之御模様、前書尊藩初之御議論ニ致帰着候得者、治乱易
地皇国之幸福無此上御儀ニ候へは、御同姓之御間柄、宗家ノ御
為大和守様江大蔵大輔様ゟ何分右等之御取計ニ相成候様御申入、
大和守様も十分御尽力被為在候様被成度との岩倉殿御内意ニ有
之候、此地之輿論も於錦地ハ如何様之被仰訳有之にもいたせ、
先何とか御謝罪之筋不相立候而者、益々朝敵之御汚名御遁れ難
被成、此悪名有之内ハ何等之御趣意も難相立候、日本流之公法
ニ候得者、何卒其辺之御運ニ致度ものと申事ハ、有志之諸藩論
も同一ニ有之、大蔵大輔様ニも是非此御道筋被為立候処よりし
て、追々公議之帰着も照明ニ可相成事とハ思召候得共、唐突御
発言も難被成日夜御痛心被成御坐候処、右様之御沙汰ハ渡頭之
舟ニ候得者、何分ニも於錦地若侯様御始御鼎力御座候様被成度、
内府公之御胸中も御探索ハ勿論之御儀ニ候得共、方今之治乱者
内府公御方寸之御決着ニ致帰着候御場合ニ而、皇国厄難之起伏
ニ候得者、億万之生霊之為ニ何事も御一身ニ御引受、御強忍被
遊候てこそ日比ニ不被為渝、御恭順之御誠意も相顕はれ、皇国
之鎮定、宸襟も御安着可被為在御儀ニ候得者、此処を能々御了
解被為在候様御周旋有御座度との大蔵大輔様思召ニ御座候、已
ニ去暮已来尾侯と御一所ニ御周旋之節も御手違之義出来候や否
や、当今之形勢と可相成ハ指掌先見之訳柄ニ付、呉々御恭順之
御一筋ニ而どこ迄も御忍被下候様御尽力ニ而、朝廷之御首尾ハ
全ク九歩通りハ御整ひニ而、今五六日御鎮静候へは御上洛御入
朝御職掌被蒙仰、更始一新之御政令も御平易ニ行はれ可申儀ニ
候ひしを、会・桑之暴動よりして御成功を一簣に欠き候而、今
日之時勢ニ立至り候儀、大蔵大輔様ハ不及申、関西一同之憤嘆
ニ而、実ニ於朝廷も甚御残念思召候事ニ御座候、此度も右同様

ニ而此一箇之忍之字を御開悟無御坐候ヘハ、勢ひ兵乱不相成事を得さる秋に相運ひ候得者、夫ゟ以往者皇国之紛乱申迄も無之、遂ニ外国之呑噬と可相成ハ必定候ヘハ、大蔵大輔様にも深く御辛労被成、先達而ハ既ニ御出府ニ而可被仰上歟とも御内決被成、御国表江も被仰遣候程之御儀ニ候得共、又此表ニ無御拠御次第有之、不被任思召唯々夜白御案労之処、御移りも有之事と相成候ヘハ、御宗家之御開運此期を御失ひ被遊候而ハ、最早御滅却之外ハ有御坐間敷被思召候間、繰返シ〳〵も皇国御宗家之為ニ無比絶倫之御尽忠被為在度思召、御直書を以ても被仰進候得共、猶老夫ゟ賢契迄委細可及拝啓旨被仰付候ニ付、御大任賢老万万御推察被成候得とも、偏ニ御依頼思召事ニ御座候、此段御含可然様御取成被仰上可被下候

臆断私説

岩倉卿御内意と申条、是非御同志之御方々御内談之上之儀ニ致察候、卿云大蔵殿定而宗家之儀ニ候得者案労勿論なから、口外難致時勢故不得止黙止と相察居候処、家来ゟ関東之模様相聞之、前橋之正論幸之義故此方ゟ致発言候、何卒一ト尽力有之度、大蔵大輔殿ゟ外ニ担当すへき人無之と、殊之外乗懸り被申候

一此一件ニ就而者、大蔵大輔様老夫を錦地江差出之思召ニ付、今朝岩倉殿江罷出及御談候処、家来壱人之申口ニ而虚実も難計、且敵地之事ニ候得者如何様之次第ニ相成候歟も難計候ヘハ、罷下候儀ハ決而不可然候間、早々以書面申越、返答之模様ニ寄順境にも候ハヽ其節罷下り可然、唯今黒白不分明之処江踏込ハ無謀之至ト被申ニ付、書面往復ニ相成候而ハ彼是手間取も難計、其内遂ニ出兵等ニ相運ひ候而ハ詮もなき事と相成候、其処如何可然ト相答候処、唯今双方隔絶之勢故是非とも御征討ゟ外ハ無之候へとも、如此是ゟ手を附候事有之候得者、其一左右相分リ候迄ハ大兵を発候事ハ無之様心得居候間、其儀ハ不及懸念、何分早速ニ往返相成候様被申聞候、是ニ而も成丈ケ穏便ニ相済候様との朝議ハ粗相分り候

一昭徳院様御遺言ニ而田安公御跡目之事ハ、兼而和宮様ニも御承知被為在、此度御家御相続を和宮様御願ひ御直書ハ岩倉卿手許ニ有之由被申候、夫故御壱人様さへ御伏罪ニ相成候得者、御宗家之儀者身命ニ換へても御相続御取持可申与被申聞事ニ御坐候、此卿一乱前ハ旧内府公之為ニ実ニ不容易尽力有之候処、是者水泡と相成候得共、此上ハ徳川氏之為ニ又尽力致候も、矢張朝廷之御為、皇国之為と被申居候而、誠意相違無之候

一卿云御伏罪之上ハ割腹てもサセねバナルマイガ夫を直に云レタ次第ニも無之候得者、書面ノ方かヨイテハナイカとも被申候、実ニ恐入候口上ニハ候得とも、朝敵と見て征伐誅滅之御題号ニ候得者、主将切腹して士卒之命ニ代り候蹤跡も数多有之事ニ候得者、其辺ヲ暴論有之候事と被存候、此儀ハ御伏罪ニ而天裁を被為仰候事ニさへ相成候ヘハ、其上之寛典者公議之帰する所ニ可有之候得者、兎角之儀御自儘ニ御決定有之候而ハ、却而御不

敬ニ相当り可申与奉存候、会・桑之処十分之御寛典ニ而君侯之生命を被保候迄ニ候事、血食ハ迚も難計可有之候、此処江御未練ケ間敷御所置有之候而者、宗家之御故障とも可相成候得者、御深考被成下候様仕度候、朝廷より夫てハ足らぬ、是てハ済まぬと御いとり無之様、事理至当之処十分ニ御処置御坐候而被仰上度、其上ニ而たとひ彼是御注文有之候而も、夫ハケ様と条理分明ニ如何様と御聞入有之様ニ有御坐度奉存候

一御謝罪之御次第、此地之輿論ハ旧内府公之思召ゟ出、会・桑始閣老諸有司之内、暴発ニ関り候向夫々ニ御罰殛有之、御自身ニも御恐縮御謹慎ニ而御伏罪斧鉞を被為待候御手続と相成候得者上等也、○旧内府公御悔悟無之ニ付、他ヨリ先ツ内府公を禁錮し、指次キたる会・桑始を誅罰し而後、徳川氏社稷之為に嗣を乞ふハ第二等也、○徳川氏之臣子、事に関る者各自刑して罪を顕ハし、内府公之御罪ニ代り御悪名を雪メ可申者、臣子之当然なるへし、○閣老・参政其他事ニ関る諸有司割腹し、滝川等之首悪ハ刑戮すへし、○会・桑君侯たとひ事に関らさるも、其家来よりして宗家之傾覆を醸成し、天下之大乱を引起したり、先ツ家来を誅して自らも割腹して罪を謝すへし、会・桑の家来自刑して其主の罪を贖ふ事もあるへし、○会・桑頑然として其罪を知らずんは、徳川氏或ハ其親族又譜代よりして是を討伐して、朝廷天下ニ謝すへし、○御上洛御先供より事起りしは鳥羽の方也、伏見の方ハ如何、始より実に御先供斗ならは事爰に及はさるへし、晦日已来会・桑武装に而北上する故、反乱顕然と称して関を鎖し伏を設るに至れり、○反を以て誣らるゝ程成形迹あるの上ニ、無形之除姦討罰を口実とせられ候而も、其実を不被遂故、只飾非之造言ト相成、愈逆罪を重ねられ候勢ニ候事

一卿又云、此謝罪之道相立候様大蔵大輔様ゟ尾・紀始何方へ成共被仰談、精々御行届ニ相成候様御周旋有御坐度との御申聞ニ而、大蔵大輔様も、此筋何卒御成就少も早く、御宗家之御先途も御定り、御安堵相成候様との御懇願故、少も尊藩之御力ニも相成候様と之思召ニ而、岩倉卿御内意旁今夕ハ尾・紀之御家老被仰遣、右之次第御相談ニ相成、猶彦根・藤堂其他外藩之御方々江も被仰談、所々ゟ御申入ニ相成候様之御積ニ御坐候間、此儀も御心得置被仰上可被下候

一錦地之御模様如何有之候哉、実ニ難計候得者、調不調之御見込者一日も早く御報告相願度候、成敗ハ後日之事、先ツ御調和之方江御取懸り可被遊御儀ニ候ハヽ、其御心組ト申儀ヲ朝廷へ申上候得者、夫ゟ先之御運方ハ御順席も可有之事故、左様ニ御急ぎニ不及候得共、向背両途之分別者精々早急不相分候而ハ、此地ハ已ニ御征討御手下シニも相成候上之儀故、いつれとも不相分因循日を経候而ハ、朝廷之方も甚御不都合ニ相成候得者、無拠又出兵之運にも可相成、左候而ハ挽回甚六ケ敷事と相成候、此処を篤与御推量ニ而、差向之御見込、和戦いつれの方と申儀ヲ呉々御報知相願候、実ニ此度ハ治乱之境界、乱ニ成候而ハ相

済不申、大乱を救ふへき期ニ至て救はす候而ハ、千載之遺憾ニ御座候

一社稷御保存之大小軽重ニよつて、御謝罪之軽重有無之論ニ及はれ候様之事ニ而ハ、利害を先とせられ、御誠意ニ者無之候得者、迚も社稷之御保存難被遊候、已ニ先達而も御官禄之事御双方ゟ御直切りニ而、大蔵大輔様も其間ニ御立被成、所謂上下交征利之勢ひ故、殊之外御苦心被成、漸く御折合ニ相成候処、御暴発ニよつて御直切り之事ハ扨置、御官禄共ニ御無シ被遊候御次第ニ相成候、夫か指見へ有之候故、左様ニ不相成様との御周旋ニ而御座候ひしかとも、既往之事ハ不及是非、此度之事亦其通りにて候、此場合ニ相成候得者、御十分罪を御引受被遊、社稷と共に御一身も御投ケ出シ天裁を御仰被遊候得者、其上之義ハ天下之公議有之候得者、決而御不当之事ニハ相成不申ハ道理と申者有之、其場ニ相成候而ハ御愛憎之御政道ハ行はれ難き事と相成候ハ必然ニ而、其儀ハ大蔵大輔様ニも万々思召込れ候次第も御坐候へ共、唯今夫を彼是と御申出ニ相成候而ハ、前徹（轍）之如く相成却而御為ニ相成不申候、先ツ臣子之道を御尽シ被成候へハ、自から君臨之御仁恵行はれ可申ハ倫理之当然ニ而、御疑ハ有之間敷事と存候

一昨日問罪之勅使発遣之朝議有之候、其次第如何と申義ハ御治定無之候得共、何分糺問之筋ニ者相違無之候得者、右勅使御東下以前ニ、御謝罪状御持出（指）之運ひと相成候へハ重畳之儀、夫迄ニ御行届不相成候ハヽ、問罪之節御指出ニ而も宜候、唯勅使御指付ケニ御罪を御問はれ、御狼狽と申様成御次第と相成候而ハ、最早夫限ニ而、遂ニ御割腹の御場江も可被為運候

一先達而大蔵大輔様御出府も可被成哉之御内評有之折柄、越前丸岡藩之家老有馬帯刀（御面識之様ニも承り候）致出府候事故、大蔵大輔様御出府ニ相成候ハヽ是非下働可致ト、御謝罪論相立候て大ニ意気込居候処、御出府御止メニ相成甚力落ニ者有之候得共、何分此時ならてハ尽忠之時節も無之と存詰、出府之上ハ是非尊藩江御手寄申上度と申居候、罷出候哉如何、弊藩之見込等ハ此者へ厚申談置候事ニ御坐候、是迄ニ罷出居候ハヽ此度之一議も被仰聞可被下候、いまた不罷出候ハヽ、御呼出シ御手先江被召使候ハヽ、閣老初広く立廻り候者ニ而御間ニ合ヒ可申、小藩ニハ中々感心なる者ニ御坐候、乍序及内啓候、下略

正月廿四日　　中根雪江

山田太郎左衛門様

一同日岩倉殿より書翰を遣はさる、是ハ本日前橋侯江直書を発せらるゝ筈にて、已に飛脚之準備も整ひ居けれと、此節から重大に渉る事件にもあり、且嫌疑も不少事故、岩倉殿の口頭のミを信して直書を発せらるゝハ、少しく軽率の嫌なきにあらすとて、昨廿五日毛受鹿之介を以て岩倉殿へ内情を陳向せしめられし故、本書を遣ハさるゝ事となれるなり、如左

愈御安康珍重不斜候、然者今度徳川慶喜進退実ニ不可言次第、百事去候儀ニハ候得共、尚今日ニ至り為宗家御苦心之条令推量候、若条理上ニ於テ齟齬する事なく、其道相立候様有之候ハヽ、豈血食之事懸念有之間敷歟、聊見込之旨も有之候間、足下内々周旋之義後難ナカルヘシ、乍併素々廟議と申儀ニハ無之、臣一己之見込之儘申進候迄ニ候也

正月廿六日　　具視

越前宰相殿

一同日御徒飛脚高木要助京師に着す、去る十八日晩江戸を発し、福井江廻り、本日着京せしなり、是ハ去る十七日江戸に於て重役を召喚せられ、飯田主税西丸へ登営せしに、大目付戸川伊豆守を以て慶喜公の御直書を渡されし故、特に飛脚を命せられしなり、慶喜公の御直書如左

此程別紙之通被仰出候趣承及驚愕之至、素々途中行違より不料先供之者争闘致し候迄之儀ニ候処、斯之通之御沙汰ニ而ハ甚以心外之至ニ候、殊ニ静寛院宮様ニも深御心配被為在儀ニ付、積年之徴誠御諒察之上御周旋有之候様致懇望候、不一

正月望　　内府

大蔵大輔殿

一同日二条城を以て太政官代に宛らるゝ旨布告あり、如左

一太政官代是迄被用九条家候得共、明廿七日ゟ以二条城太政官ニ被用候事

一参与役所同城内ニ相設候間惣而是迄之通取扱候事

正月廿六日

一正月廿七日酒井与三左衛門を使として、徳大寺殿・正親町三条殿江書翰を差出さる、昨日飛脚着、慶喜公の直書に接せらしか、書中聊も御悔悟之御様子なし、故に御周旋可被成様もあらさりし故、其儘太政官江指出さるへしとて、書翰を添両卿へ差出されしなり

一翰令啓達候、春寒難退御座候処、御両卿愈御安泰珍重奉存候、抑去る十七日江戸表西丸城江重役呼出ニ付罷出候処、戸川伊豆ゟ慶喜直書渡有之ニ付、右直書国許江指遣シ、夫ゟ昨日以飛脚差越候ニ付、右慶喜直書別紙共御両卿迄差上候間、総裁宮迄御呈達希上候、此段申入候也

正月廿七日　　慶永

正親町三条前大納言殿

徳大寺中納言殿

二白、時下御自愛奉懇祈候、下官聊風邪今日之処太政官江参勤御断申候、明日何レ罷出万々可申入候也

別紙

慶喜直書中上包前内府ト有之、書中内府ト有之、右ハ従朝廷慶喜官位被止候得共、是ハ従朝廷列藩へ布告有之候迄ニ而、徳川

慶喜江官位被止候御沙汰等ハいまた出不申故、本文之通内府ト認有之儀と相考申候、此辺も可然被仰入被下度候也

一正月廿八日去る廿二日江戸発御徒橋本兵吉京師に着す、本月十九日ゟ江戸西丸に於て在江戸諸藩重役江慶喜公直達せられし趣意書、并に廿一日平山図書頭を以交附せられし慶喜公の御直書を持参せしなり、如左

直達趣意書

今般皇国之御為を以政権奉帰候次第ハ何之懸念も無之、誠忠可尽存念一統も尽力致呉候儀ニ有之、登京之節奏聞之次第も承知之儀ニ候、然るに京坂戦争も行違之儀ニ而、追々承り候得者朝敵抔との風聞も有之由、兼而之素願も不相立残念ニ存候、併此上忠誠相尽候存念ニ候、就而者朝敵等ニ無之趣ハ申立度候へ共貫徹間敷ニ付、右之処一統ゟ尽力致シ、京地江申立呉候様頼存候

〆

慶喜公の直書

一翰拝晋、然者去ル三日先供之兵隊鳥羽・伏見両道ゟ入京之処、薩藩士指留候、応接中伏兵一時ニ起り発砲ニ及候ニ付、両所共無拠応砲、怪我人も多人数有之、実ニ意外之次第ニ而、不料奉驚宸襟、人民を損傷致し、兼而之素意ニも相背候間、断然大坂城を御両家江托シ、兵隊を為引揚、全く一時先供之争闘ニ傅会して、或ハ朝敵之悪名を負はしむるやニも承り、実ニ意外恐嘆之至ニ而、畢竟華城を捨て赤心を表候得共、何分近来事々素心ニ背候事のミにて、遂に病魔ニ被侵、事務取扱兼候間退隠致し、跡式之儀者相選申付候積、何卒是迄之御厚誼不相替御尽力被下、朝廷を始外藩江も御説諭、前文意外之汚名相雪候様、此上ニも御鼎力千万拝嘱する処ニ御坐候、書不尽言万面罄

正月　　慶喜

大蔵大輔殿

右の直書ハ慶永公のミならす、外在京諸侯方江も被遣候よしなるか、矢張最前正月望の直書に大同小異にて、悔悟之意味なく退隠云々之一段を加へられたるのミ故、例に依太政官江差出さるゝのミに止り、周旋尽力せらるへき材料にハならさりき

一正月廿九日中根雪江より大久保一翁江書翰を発す、是ハ昨廿八日橋本兵吉か持参せし慶喜公の御直書中、毫も悔悟せられし意味あらさりし故、斯くては慶喜公の負はれし朝敵の汚名は到底免かるへからす、故に昨年十二月已来今日に至るまての事実を詳述して、徳川家の再考を促かせるなり、左の如し

本月（マヽ）日御認大蔵大輔江之御呈書拝見仕候、段々賢労之御様子奉拝承、為皇国為宗家降心大慶仕候、扨御紙表之趣此地之事情与錦地之御見込ミ与反対仕候ハ、此度之儀委敷御承知不被成故と被存候、右ニ付既往之事ゟ順序を追ふて略陳仕候、抑此度之

御一挙ハ奸臣之兼々施設致置候套中へ全く御陥り被遊、奸計十二分ニ行はれ、環を千仞に転し候勢故、即今愁に正議を執候ても約る処一己を快く致候迄ニ而、宗家に対候而ハ害あつて益なき形勢に候故、君臣共ニ紅涙を呑んて天定の時を相待罷在候、彼党ハ俗ニ申喧嘩買ひニ候ニ付、彼に先達而御妄動被為在候へハ、忽ち朝敵之名を為負候者指見え候事故、御恭順御鎮撫之筋御行届被成候得者、彼の策破れ彼者朝敵と相成可申候、御恭順破れ候へハ即朝敵と可被為成、氷炭易地一瞬間に相定候機変ハ、君臣共御直ニも申上、閣老方参政中へは丁寧反覆幾百回及懇談ニ候得共、不肖之者共之申上方故徹底仕兼候哉、御採用相成不申、遂ニ今日ニ立至候ハ万古千載之遺憾と奉存候、其子細と申ハ、兎角最初に行はれ候降官削地之論消滅致兼、種々御難題出て、又二条城ニ而ハ降削之所謂無之との議あり、尾・越其間ニ立周旋困苦を極め、漸くにして朝議を宥め、寛宥之御趣意之御書面尾・越江御渡ニ相成候故、夫さへ御承知ニ相成候へハ、直様御参内、引続御職掌も可被蒙仰迄ニ相運ひ候ニ付、尾・越老公右御書付持参、下坂之上被及言上候処、一々御承知被為在、御請書も御渡ニ相成候ニ付、猶又御上京之御都合思召相窺候処、何時ニ而も御上京可被遊候間、朝廷之御都合安心之処、尾・越ニ而御請合申上候ハヽ、御鎮撫御行届之趣ニ而御上京可被遊候間、直様御参内等之御手続ニ相成候様、御上京之上御参内御日間取れ候様にてハ、又々人心動揺可致候へハ、其辺相心得御案内申上候様与の御直約此度於御地被仰出ニ尾・越を以御沙汰有之と御座候ハ相達仕候にて、廿九日夕乗船帰京ニ赴き申候、然る所翌晦日御地ゟ滝川播州上坂ニ而煽動有之由ニ而、華城俄然兵議起り、在坂之諸藩へ出兵之御催促有之事と相成候、是ゟ先き何故ともなく淀・伏水・橋本・牧方辺へ御配り置之兵隊此頃朝廷ニ而ハ、坂兵北上之由抔与御気遣之御沙汰有之朔日已来北に向ふて追々御繰出、会・桑兵も戎装ニ而動き出し候風聞、二日夕方京師江相聞候ニ付、夫ニ而ハ看す〳〵奸謀之套中に向ふて之御進歩傍観致居候而、恐悚憂悶に堪兼、何分早々御鎮定相成候様為言上、下坂被命候得共微力ニ而ハ大勢挽回無覚束奉存候ニ付、肥後家老溝口弧雲・津家老藤堂帰雲・土州家老深尾鼎・柳川家老十時摂津等共ニ下坂、唯々御妄動有之候而者忽ち朝敵之名を被為負候間、速ニ御鎮撫相成候様可申上旨被申付候処、何も決然として下坂可仕与致承服、三日暁ゟ追々下坂、老生者尚又三日朝下坂前、岩倉前中将卿へ罷出候処、岩倉被申候ハ、薩長之伺ひ昨夜ゟ唯今迄ニ三度也、夫ハ坂兵次第ニ相迫り候勢候へハ反状相違無之、打払ひ可申哉との事なれとも、只今一発致候哉否哉、大事忽ち敗れ、朝廷之厚き思召も、内府公之恭順も、尾・越之周旋も、乍不及拙者之是迄尽力も悉く水之泡と相成候而已ならす、今後の見込も不相立事と相成候故、御沙汰有之候迄ハ決して手出し致間敷と三度共申聞、唯今も不服なから引取申候、是ゟ惣参内ニ而朝議ニ相成候間、大蔵大輔ニも早々致参内候様申聞候様との事ニ付、申達候者、其儀ハ承知いたし

候歟、如此危急之場合ニ相運ひ候へ者猶一ト尽力仕度、大蔵大輔存ニ而只今ゟ下坂申付候、ケ様之形勢ニ而も鎮定之道相立、内府公御上京ニも相成候ハヽ、過日来及御談候通り、直様参内等之運ひニ相違有之間敷哉、今一応相伺度、下坂之上折角鎮定いたし上京候而も、此度之過失ニ而参内も不相叶与申様成事ニ而ハ、再度動乱ニ相成候故、念を入候とケ条書を以押詰候処、上京之運ひニさへ相成候へハ、兼而申談候通り万々無相違請合候との事ニ付、夫ゟ帰邸、猶又指当り候伏見表鎮撫方、尾州申合等之儀申談、彼是午後相成発足、陸行ニ而四ツ塚辺江罷越候処、薩兵撤兵を敵も無ニ畷道江配り、今ヤ遅シト待受候勢ひ、夫より鳥羽村ニ指懸り候処、村内ニ而坂地之第一大隊勢揃之最中也、是ハ未ノ半刻頃にも可有之候、此景況ニ而ハ迚も無事ニ鎮撫ハ無覚束と一驚を喫し落胆候へ共、強而精神を励し南下之処、後ゟ伏見并鳥羽へ繰出し候坂兵陸続として蟻行之如くに御坐候故、弥以胸中不穏候得共道を急き罷越、橋本之関門へ数丁ならす八幡山を打越し、伏見ニ当り火光天を焦し候ハ薄暮前ニ而候、大事と大息仕候得共今朝岩倉卿之口上ニ而ハ容易に朝廷ゟハ御指図無之模様と申、大蔵大輔も参内精々指留之含ニ候故、たとひ兵端相開候とも朝廷ゟ御指図さへ無之候得者、坂兵と薩兵との私闘ニ候へハ、又取直方も可有之と思ひ直し、何分華城之御安否相伺度と、牧方ゟ乗船四日暁七時過大坂中島之弊邸江着船候処、留守居之者ゟ先刻於御城中御達之由ニ而、彼除姦之御発令、軍隊ニ可馳加との御文段を拝見致し、是迚申上候事共御用ひなく御私に凶器を被動候ハ、正敷術中に御落入朝敵之名義御免レ難被遊被為成たりと、大息虹霓を吐き悶絶辟地仕候事ニ候、其上今暁ハ坂地薩邸御攻撃之沙汰ニ而、御手配御厳重之由抔咽き合候内、地雷二発中之島迄震動いたし、薩邸燃上り申候、事之為体以之外故、直様登城永井君拝謁、如何之御様子と相伺候処、御奏聞書も上達致兼候内、御先供之行違ゟ戦闘ニ相成、上様御始御当惑との御口気、今後之御施策如何と相伺候処、御無策之由ニ付、夫ニ而者尚以御大事と、誘引之諸老も追々御城中ニ会し種々申談、閣老衆始ゟも御談有之候へとも、思ひ込ミ下坂致候一条ハ、何レも途中にて戦闘と承り、惣而徒然と相成、此末之処も軍隊ニ可馳加との御布告有之候へは、最早御名義不相立、如何ニも可致様無之与顔を見合せ、今五六日御辛抱者難被成下候ひしかと、既往を恨ミ候迄ニ而、一同無策ニ帰し退城致候、依之即夜乗船、橋本辺ニ而平明、追々前途之砲戦地を動し候故、間道を廻り五日暮時前京着、三日以来之模様承り候処、三日夕伏水・鳥羽ニ而一砲相発候哉否、兼而御用意有之候哉、四十流レ之錦旗を持出し、四日ニハ将軍宮を被命、宮中ゟ直様御進発ニ相成、朝敵之名を十分ニ掲け掲（衍）け候事ト相成候由、戦争之手始前後之論も、発砲已前之事ニ而、已ニ発砲と相成候而ハ夫式之前後ハ更ニ論せす、晦日以来之出兵、会・桑之戎装等を惣而反状顕然と唱候故、如何とも申訳くへき様無之、

又除姦之挙ハ同情之諸藩も多く候故、其実を被遂候御運ひニ相成候へハ、内応可致と手くすねを引き、片唾を飲み待候向も有之候得共、坂兵者一ト支もなく敗走之体故、約束なくして応援之兵を挙くへき様も無之、切歯扼腕、憤歎悲泣して除姦之御本懐も不被遂、却而姦計に当られ、朝敵と被為成候を傍観仕居候事之由、是も前以て聊なりとも御牒し合も有之候へハ、たとひ坂兵敗候とも、襲後搗虚之内応も多く可有之処、一向ニ御沙汰も無之、意表之事而已御仕向ニ相成候故、力を尽すへき様も無之事ニ相成候、尾・越之周旋も土藩申合セ、如何様之御難題も御恭順之二字ニ而取消し、彼謀を伐ち居候内、姦家之銭糧及欠乏、旧臘ニ至て春来廿日与ハ難支処迄困窮ニおよひ候義も相分り、上様御上京ニ相成候へハ目出度御事済与申を引塩にいたし、二兇も兵を率て可致帰国密談も相聞候事故、旁以今暫く御強忍ニ而御上京之御運ひニ相成、朝堂ニさへ被為立候へハ、取りも直さす摂政関白之御場合、除姦抔之事ハ御掌握中之一小事と相成候へハ、同志之諸藩ハ勿論、其比ニ相成候而ハ縉紳中ニも大計成就を希望之向も不少、晦日夕帰京、元日者休ミ二日ニハ已ニ上京、御上京之御運ひ方ニ朝議も相立候、即夕ニ前書相記候通、いまた途中に罷在候、晦日ゟ坂地ニ而者兵事御催し有之事与相成候者、御衰運之秋とも可申哉、尾・越も恐く二念なく尽忠之志ニ候得共、猶御嫌疑も有之候哉、御隔て勝にて御相談無之、坂地ハ坂地之御振出ニ相成候故、京地之手筈合期不致悉く及齟齬、御恭順〳〵と申上候ハ、朝廷江対し奉り候而も恐入申訳無之、諸藩江者面目を失ひ申候、又華城御明退きも御誠意を被表候との御儀ニ候へ共、余り成御不都合ニ有之、せめてハ閣老御一人ニ監察等御指残し、御城附之武器・銭・穀等も御目六を以立派ニ御托しニ相成候へはムザ〳〵と焼失ニ及ひ候様成事ニハ相成間敷、田宮壱人居残りニ而尾・越之人ニ候へハ、誰レ彼レ之分ちもなく引留め、口先きにて引渡し、逃支度のミ之為体ニ御座候故、火之元吟味も不行届哉、彼是申内ニ出火長人放火とも又地雷発と云ひ一定の説なし、窃ニ云地雷也と誠ニ以埒もなき御次第と相成、葵章之大砲を車に積、分捕之札付にて引取候有様、目も当られすと申有様にて、御誠意も何も相立候事ニ者無之、華城之御退去ハ天下之誹笑と相成候、先ツ有体ニ申上候得者此表之事情者右様之次第ニ候故、中々三日御先供之行違抔を被仰立候而も、其以前ゟ戦争之御下搆へ被為在候事者致承知居候故、実ニ御先供ニ而も決して左様ニ者受取不申候、殊ニ朝廷にて蛇蝎之如く御嫌悪にて御暇ニ相成、帰せ〳〵と御催促之会・桑後ニ付き居候事故、彼是之被仰立ハ遁辞之拙き者与冷笑致居候勢ひにて候、又前記御上京御先供斗りにも無之、除姦之御目論見ニ相混し、剰へ御奏聞已前之御発令御手違とハ乍申、御形跡ニ於テハ恭順之道更ニ相立不申候故、別紙にも相記候通り、何事も反形ニ取成され候ても申開き難く、且朝敵之悪名御残念ニ被思召候ハ、乍恐御尤至極之御儀にて、一ツ御手違ニ相成候へは、其御残念ニ被思召候

悪名を被為負候者、眼前指当ニ御座候故、不被為負様にと乍不及周旋力を尽し九歩ハ仕課ふせ候処、一歩之際にて御堪忍袋切れ候故、果悪名を被為負候儀にて、唯今此地之名分名義上ニ而ハ負せたりとハ難申、御負ひ被遊候と申が正議ニ御坐候、御心術上之御赤誠も、御形跡上ニ照らしてハ貫徹可仕様も無之次第ニ相成居申候、此処を能々御汲察無之、偏ニ御赤心御誠意ニのミ御主張有之候而も、畢竟無形之儀ニ御坐候へハ、於此表跡形もなき証人に立候而も信用すへき様も無之姿ニ御坐候へハ、誠ニ恐入候得とも、唯此上ハ此度之御始末何共御恐入被遊、御一言之被仰訳も不被為在候得ハ、如何体之被仰出御坐候而も、兎角被仰上候義ハ不被為在候、御十分御悔悟御謝罪之御筋道不相立候而ハ、朝廷ニ於而も御聞届被遊度候而も、難被遊御次第柄ニ相成居候へハ、右様之御振合被仰上候へハ、御恭順之御誠意も御貫徹之道相立可申歟、彼是と被仰訳ケ間敷事被仰上候程、却而御名分上之御障りと相成候而も、御開達之筋ニ者相成申間敷、唯今之処ニ而ハ只管御悔悟御謝罪之外ニハ御条理相立かたき様ニ奉存候、此御筋さへ相立候ハヽ、又朝廷にも御寛宥之御条理相立可申ハ自然之道理と奉存候、尤御悔謝も乍恐御口上計にてハ相済不申、其御実跡を可被相立御事ニ御座候、先ツ第一ニ会・桑之二藩忠実之心底ハ可憐可感候得共、智見ニ暗らき国柄故、朝廷ニ叛き（帰国の命を拒ミ、不帰のミなら戎装北上す官軍に向ふて戦ふ）天下を騒かし（此乱ニ藩より事起れり）宗室を倒す（所謂贔屓ニ引倒せり）罪悪不可免、必誅と申ハ関西之輿論ニ御座候、又坂地ニ於て事ニ関る諸有司等夫々御罰殛ニて、御自身様にも罪を引かせられ、前段之趣ニ而不被仰上候而ハ、御実跡相顕ハれ不申候、此処迄省悟御謝罪ニ相成候へハ、年来之御誠忠又御逆心可被在様も不被成御坐御儀も、無御拠御場合にて御叛形と相成候事も、是亦天下万人之知る所ニ候へハ、必御雪冤之儀も起り可申ハ必然御坐候得者、即今之処ニ而ハ御形跡上ニ於て御遁れ難被遊御名義、御悔謝にて御取消し不相成候内ハ、一人として口を開き候者ハ無之候、書ハ不尽言、前書件々之意味難及禿筆而已ならす、甚忌諱不敬ニ亘り万々奉恐入候得共、此所ニ御行違ひ御座候内ハ、天下之治る所以も無御座候故、此地之形勢事情を有体ニ奉申上候、何分方今之御長策は兎も角も干戈之動かぬ様、人心の安堵する様に御鎮定被遊候而、時機の至るを被為待候より外無御座候、是等乍恐上様之御心上一ツより外出る所無御座候、扨々恐入候事、何たる世界に相成候哉、覧長生き仕候而けしからぬ憂目を見候事かと、書に臨んて不図落涙仕候

一此頃岩倉卿内意にて同姓大和守殿迄申越候義有之候、定而御承知ニ相成候半と奉存候

一有馬遠江守家来有馬帯刀へ嘱し候儀も有之候、是も御承知ニ相成候半と奉存候、是等之説話も御参考可被下候、何分にも為皇国、為宗家御鼎力之程偏以奉翹望候、勝君ゟも老寡君江御口上、将老生江も御投書、御返答ハ前書之趣より外ハ無御坐候、乍恐

宣御伝声之程奉冀上候、春寒料峭御保護奉専祈候、頓首謹言

正月廿九日夜

一二月四日徳大寺中納言殿江、北陸道先鋒人数差出方内達の件ニ就き、両途の御奉公相勤兼云々内情書を指出さる、如左

今度北陸道鎮撫使其領々江御参着之上、為御先鋒領地相応之人数指出候様御達可相成旨、差懸り候而ハ不都合ニ付前以御内達有之段、若州小浜表ニ於テ差出置候家来江御達御座候旨越前守ゟ申越候、然ル処私義昨年来上京仕居、別而当今闕下不容易騒擾ニ立至候義故、禁闕御警衛御沙汰之次第も有之、追々人数差登候処、御固場も被仰付、其上御役被仰付候ニ付、日勤等ニ而彼是多人数滞京為致候事ニ御坐候、元来不肖之私過分之御役儀ヲ蒙り、不堪其任ハ勿論ニ御座候得共、専ら御役筋ニ挙国之力を尽し御奉公仕候心底之処、又々御先鋒江出兵仕候而者、下タ地国元薄地少人数之処、藩屏之任立兼候様相成、両様之御奉公相勤兼殆当惑仕候、兼而殊遇之寵命を蒙候上、彼是奉願候者奉恐入候へ共、右無拠次第御汲察被成下、何卒御厚評之上、何とか一途ニ尽力仕義出来候様、宜御沙汰被成下候様奉願候、以上

二月四日　　越前宰相

一同日坊城殿より大蔵大輔辞任を聞召さるゝ旨達せらる、左の如し

被辞大蔵大輔之事被聞召候、仍而早々申入候也、恐惶謹言

二月四日　　俊政

越前宰相殿

一同日南部彦助京都に着す、去月廿六日江戸を出発せしなり、此時出発前日廿五日西丸に於て板倉殿より本藩重役を呼出し林矢五郎登営す交附せられし奏聞書并慶喜公の直書を携来る、さて林矢五郎登営せし時、板倉殿より奏聞書の趣可然御周旋相成候様、又朝敵ニハ在らせられすとの弁解、且御相続を紀侯と被相願候へとも、是者朝廷の思召次第何様にも被仰出るゝ様との内意を伝へられたり

御直書

慶喜相続已来乍不及勤王之道ニ心を尽し罷在候得とも、事々不行届恐悚之至ニ付退隠仕、相続之儀ハ紀伊中納言江被仰付被下候様仕度奉存候、此段御奏聞被下候様御頼申候、以上

一二月五日昨日指出されし鎮撫使先鋒人数云々願書に、御附札を以て御指令あり、如左

京師御警衛人数差出有之、且越前宰相上京之義にも候間、北陸道鎮撫使為先鋒人数指出ニ不及候事

右ニ付即刻態飛脚を以、敦賀出張酒井十之丞へ申達之

一昨日南部彦助携へ来りし徳川公の御奏聞書を、慶永公御熟考の上、此御奏聞状ハ過日来追々仰遣ハされし旨趣に異なる所なし、今日

に至るも徳川公の其罪を自反せられさるハ、畢竟朝廷を始め上国の形勢情状を詳知せられさるか為めなるへし、東西の情状形の如く齟齬しては、啻に徳川家の為めに不詳なるのミならす、遂に皇国中の紛乱ともなるへけれは、此際人を江戸に下して、此地の情状を詳述せしめ、且御奏聞状ハ一ト先返上すへきなりとありて、即ち本多修理に東下の内命を下され、さて其趣を予しめ徳川公へ仰進せらるへしとて、別に橋本兵吉を飛脚として直書を差出されたり、左の如し

謹而奉言上候、益御機嫌能被為入、先般海上無御恙御東帰奉恐悦候、抑先達而ゟ毎々尊書頂戴被仰付難有仕合奉存候、殊ニ正月廿五日御渡之尊書并御相続御願書、昨四日京着拝見仕難有奉畏候、直ニ太政官代総裁宮江可差出之処、愚存之義も有之態与不指出候、右ニ付而ハ言上仕度、一両日之内家老本多修理其御地へ差上申候間、板倉伊賀面会委敷聞取候様乍恐奉願上候、中々筆頭ニつくさるゝ品（マヽ）ニ無之、何分にも微忠御亮察被成下、至当之御所置為皇国、為御家奉懇願候、書余万々之心緒ハ家老江申含候、誠恐誠惶昧死百拝

二月四日　　慶永上

一二月六日本多修理・伊藤友四郎に東下を命せらる、昨日之御決議に依り、京師之事情を徳川殿江申進せらるゝためなり、修理・友四郎に物を賜ふ、左の如し

御紋奉書紬御召壱　　本多修理
莫大小襦袢　壱　　伊藤友四郎

〆

一二月七日本多修理・伊藤友四郎京師を発し江戸に赴く、此時大久保一翁へ可被遣御直書をも持参せしめらる、如左

密呈、春寒料峭、先以徳川公益御機嫌能被為入奉恐悦候、随而足下愈御清安会計惣裁被命候由、御苦労之儀乍去為御家抃賀、慶永迄も遥ニ安堵之次第ニ候、下官碌々瓦全罷在、且旧冬於朝廷議定職被仰付、其後固辞更ニ被命、先般又々内国事務総督被命、如下官不肖之者を御登用恐入候ハ勿論ニ而、宗家之御恥辱、朝廷之御失体無此上奉存候、乍併奉命之上ハ、何分にも決死尽忠罷在心体ニ御座候間、寸心之処ハ御承知希上候、公御東下後者実ニ徳川支族之身分ニ而者片身狭く、太政官へ参勤致シ親征或ハ出兵等之評議之節ハ実ニ残念無限、ハラワタ断チキラレ候心地ニ候、不肖之心御恕察偏ニ希上候、今日迄太政官出仕朝廷御用取扱候も、一ツには宗家之御為、御謝罪相立、御家御開運之尽力仕度と存込候計ニ而、如不肖下官ハ一日も在職ハ出来兼申候、扨今度公ゟ御直書被下候ニ付、所存言上仕度儀も有之、此地之景況申上旁家老本多修理差出申候、表向ハ伊賀江申上候事と存候、尚事柄ニ寄候而ハ御前江被召出、御直ニ京師之模様、太政官之景況、下官之愚存御聞取奉願度候、留守居伊藤友四郎

と申者差添下し候、修理義御前江被召出候節ハ、友四郎も同様奉願度候、修理近来カラツンボ御座候間、上意之趣伺取も六ケ敷哉と被案申候、且又足下ニも何卒修理・友四郎御逢被下度、下官所存委曲御聞取被下候而、何分にも為宗家至当之御所置奉懇願候、偏ニ御尽力奉依頼候、此御謝罪之道不相立候得者、京師ニ於て尽力之道も無之、当惑之次第ニ而候、所存之趣ハ修理へ委細ニ申含候間、同人ゟ御聞取被下度候、先日ゟ毎々御投翰忝、殊ニ墨筆恵賜忝毎々御懇切之事致多謝候、一々返答不贅候、室賀甲斐も在京中毎々相談いたし申候、何卒万事此辺御相談被下甲斐江も尽力之義被仰下度候、何そ呈上と存候へ共、今便取込後信可差出候、用事拝答旁如此、書外之心緒ハ修理へ申含候也

二月六日於京師邸　　慶永

会計事務総裁大久保君

尚々時下御自愛専一ニ存候、下官宰相大蔵大輔両人之様ニ相聞、朝廷向不都合之廉有之候故、奉辞大蔵大輔候間、此辺も御序之節被仰上被下度候

一同日北陸先鋒御用と御親征親衛軍と御振替相成度旨を願出ける、是ハ昨六日軍務掛りより茂昭公江左の如く御達しありし故なり、左の如し

松平越前守

今般御親征被仰出候ニ付、北陸道先鋒被仰付候条、国力相当人数繰出シ、諸事総督之御差図を受、令勉励候様御沙汰之事

但二月十五日迄ニ総督本陣江相揃候様被仰付候事

〆

願書

今般御親征ニ付同氏越前守江北陸道先鋒被仰付難有仕合奉存候、然処私儀去年来上京仕御役相蒙り、人数も召呼置候儀ニ付、兼而申上置候薄地疲弊之国柄、父子両途之御奉公相勤候程之国力兵数何分ニも行足り不申、尤国許江も申遣候得共、越前守ニ於而も当惑之外ハ有御座間敷と奉存候ニ付、幸私在京之儀ニも御座候間、指向此表詰合之人数を以御親征之御用相勤候様仕度奉存候間、北陸道御先鋒ト御引替被成下候様奉願上候、当今之御時態右様奉願候儀恐入候得共、何卒厚御諒察之上宜御沙汰被成下候様奉内願候

二月七日　　越前宰相

一同日土佐少将殿・薩摩少将殿・安芸少将殿・細川右京大夫殿と共に連署して外国交際之要を論し、一刀両断之朝裁を以て交際之道を開かるゝ様との意見を建議せらる、如左

臣等謹而按スルニ、古ノ能ク天下ノ大事ヲ定メ候者ハ、必先天下ノ大勢ヲ観テ緩急機ニ随ヒ処置宜ヲ得候、故ニ唯功徳ノ一時ニ光被スルノミナラス、万世不抜ノ業是ニ於テ相立候、今哉皇

上始テ大統ヲ継セ玉ヒ、御政権又一ニ帰シ、凡百ノ宿弊モ更始一新シ、天下万姓目ヲ拭ヒ治ヲ望ムノ秋也、即在朝百官自ラ奮発シ、内ハ皇上ノ御徳化ヲ輔奉リ、外ハ皇威ヲ万国ニ偃ヘ、臣子ノ分ヲ尽サンコトヲ欲ス、就中今日急務ハ皇国ト外国トノ交際ヲ講明セスシテハ不叶儀ニ奉存候、近頃朝廷始テ外国事務ノ官職ヲ設ラレ、其人ヲ御撰挙被遊専ラ御力ヲ被尽候ハ、天下ノ人ヲシテ方向スル所ヲ知ラシメ玉ハンノ御趣意ニテ、皇威ヲ万国ニ赫耀セシメ候ハ此時ニ可有之ト不耐感銘奉存候、乍併古語ニモ人心同シカラサルコト面ノ如シト申シ候如ク、在上在下ノ人未タ各々区々ノ議ヲ執テ疑念ナキコト能ハス、又或ハ漢土ノ人ノ如ク、自ラ尊大ニシテ外国人ヲ禽獣ノ如ク蔑視セシカトモ、終ニ彼ニ打負ケ、却テ駆使セラレ候様ニ成行候覆轍ヲ踏ムニ至ルヘキカト甚憂慮仕候、依テ熟考仕候処、今日ノ専務ハ上下協同一和シテ宇内ノ形勢ヲ弁シ、皇国一大革シテ開業スヘキ所以ノ方向ヲ確定スヘキ儀第一ト奉存候、是迄皇国ハ一方ニ孤立シ世界ノ事情ニ達セス、只偸安ヲ志トシ荏苒衰微ヲ致シ、彼カ為ニ制セラルヘキ次第ニ立至候ト、外国ノ他方ニ航行シ衆善ヲ包取、気運日々ニ開ケ、政事文明兵食充満シ、天下ニ縦横致シ候ト比較致シ見候ヘハ、盛衰ノ源由モ判然相分リ可申哉ニ奉存候、元ヨリ膺懲ノ重典モナクテ不叶儀ニハ候ヘトモ、控御ノ術其方ヲ得候得ハ、遠人モ懐キ服シ候道理ニテ、尤無罪ノ人ヲ膺懲致シ候訳ニハ無之候、中古朝廷ニモ玄蕃ノ官ヲ立置カセ玉ヒ、鴻臚館ヲ建サセラレ、遠人ヲ御綏服ナサレ候事モ相見え居、其後天正・慶長ノ間ニハ蛮夷共屢西国ヘ渡来交易致シ候、若モ来港不致節ハ大将軍ヨリ書翰遣シ催促シ、猶モ遅緩ニ及候時ニハ、此方大軍ヲ発シ攻撃ニ可及ナト申越候儀も有之処、島原ノ一乱以来始テ幕府ヨリ鎖国ノ令有之候、乍併漢土・和蘭ニ於テハ猶交易差許候得者、一切ニ外国人ハ攘ヒ斥ケ候ト申訳ニハ更ニ無之処、近年攘夷ノ論盛ニ相起リ、諸侯ノ内偶攘斥致候モ有之候得共、素ヨリ一国ノ力ヲ以テ不可為ハ論スルニ及ハス、且先年幕府ヨリ十年ヲ期シテ成功ヲ奏シ可申ナト申上候ハ、陽ニ其名ヲ仮リ陰ニ其私ヲ行ヒ候詐術ニテ、先帝日夜御苦慮被為遊候御儀トハ同年之論ニ無之ト奉存候、然レ者今日皇国ノ衰運ヲ挽回シ、皇威ヲ海外ニ耀シ奉ル儀ハ、万々一刀両断ノ朝裁ヲ以テ井蛙管見ノ僻論ヲ去リ、先ツ在廷枢要ノ御方々ヨリ豁眼ニ被為成、上下同心シテ交際ノ道無二念開カセラレ、彼カ長ヲ取リ我短ヲ補ヒ、万世ノ大基礎相据エラレ候様奉専禱候、仰キ願ハクハ、皇上ノ御英断能ク天下ノ大勢ヲ御観察被為遊、是迄犬羊戎狄ト相唱候愚論ヲ去リ、漢土ト斉シク視サセラレ、朝典ヲ一定セラレ、万国普遍ノ公法ヲ以、参朝ヲモ被命候様御賛成被為在、其旨海内江布告シテ、永ク億兆ノ人民ヲシテ方向ヲ知ラシメ玉ヒ度儀偏ニ奉懇願候、誠恐誠惶頓首々々

二月七日　　越前宰相

土佐少将

薩摩少将
安芸少将
細川右京大夫

一二月八日在江戸室賀甲斐江返翰を被発、室賀者徳川家の御側衆なるか、彦根藩士横川源蔵に托して書翰を呈せし故、更に横川に帰府甲州江相達候様被仰含、返翰を交附せらりしなり、如左（室賀の呈書ハ戊辰日記に譲りて記載せす）

正月廿三日之懇翰、二月八日朝彦根藩横川源蔵参邸差出、忙手披見、春寒料峭之処、先以我宗家徳川公御東下後之御安全を詳ニ被垂示、歓天喜地初而安堵之至奉存候、随而足下愈御多祥、御勤務不相替御家之御為御尽力扶賀令降慮候事ニ候、我宗家徳川公を日々存上、夜々魂飛在江戸、夢ハ夫計ニ候、下官正月中旬於太政官内国事務総督之勅命降下、如臣者昧愚にして奉職却而宗家之恥辱、朝廷之失体、速ニ可奉固辞之処、徳川公謝罪之道相立候迄と存し、固辞奉らす、因循奉職罷在候儀ニ而、下官之微忠仰亮察候、扨足下モ朝譴被止官位候義不得止事、下官ハ誠ニ御心中嘸々と落涙推察申候、徳川公之御恭順之御底意者、今日ニ至候而も聊御替り無之との事被仰下、何より以難有、先日ゟ大久保一翁ゟハ申越、於下官ハ江戸ゟ御恭順之儀被仰越候（不脱）而も下官壱人ハ徳川公之御恭順丈ケハ兼而思召相伺居候事故、能々心得、常々感服致居申候、乍去御心ハいか程御恭順ニ候とも、其姿ニ至り御恭順之実効無之而ハ、天下承知いたし不申ハ明白之事ニ候、過去之事ニ候へ共、御上京御先供之行違云々と被仰立候而も、第一帰国せしめんと朝廷江被仰立候会・桑を御先江被遣、会・桑具足着用ハ如何、是一ツ也、於坂城薩藩之罪を被揚、君側之姦を除く為、軍列ニ可馳加御軍令諸藩江布告、尚朝廷江も被仰立、書付以尾・越被出、君側之奸を除く軍列ニ可馳加との義、進軍の形アラハレタリ、上京先供ト被仰立ト相違ス、是二ツ也、徳川公於華城御東下後、城中地雷起り終炎上、是三ツ也、小事色々有之候得共、一ツモ御恭順之形チなく見得、天下反逆、朝敵を称シ候而も、下官如き支族之末坐ニ居り、夫ても恭順之心で御座リマストハ、とふも申開き難出来、不可言苦心実ニ御察し可被下候、下官ハ別而御懇命蒙り候者故、まげても御ひいき申度候得とも、どふ考候ても、御恭順之御心の申開らき口に出し難く、只今と相成候而ハ、乍内々土・芸・細川にても人心日々離れ候姿にて、残念徹骨申候、段々御申越之儀、誠心感服、別而御側近く御出之身分ニ而ハ、泣血悲嘆御察申候、於下官同然ニ候、右之通故御恭順之御心ハ難有候得共、此上御恭順之御実効顕然願は敷奉存候、第一徳川公御謹慎ニ而恐入、謹而待斧鉞と申被仰立ニ相成、クハイソウ并板閣老其外巨魁之輩、先押込被仰付候而、如何様共所置致度と朝廷江御伺ニ相成候が則御実効ニ而、其節於朝廷も公議相立、於下官支族之身何共申立様無之候得共、当職を以て精々尽力致し、社稷を存する

儀至願こゝに止り申候、此処ハ御安心可被下候、雪江ゟ川越山田太郎左衛門江委細申越、下官ゟも大和守へ申越、尚遠江守家来有馬帯刀江も申含遣候、先日雪江ゟ大久保一翁江も委細以書状申遣候、昨日家老本多修理江戸江遣候節、一翁へも委細以書状申遣候、何卒大和守・帯刀・太郎左衛門・家老本多修理・同藩伊藤友四郎御宅へ被召呼、京地之事情御聞取被下大尽力奉伏願候、尚横川源蔵江も下官逢候而詳ニ申聞候間、意衷御聞取可被下候、御親征も被仰出、近々錦旗華城江行幸（十五日未定）何れ不遠内と存候、一刻も早ふ御謝罪之道相立候様致度、夜白奉期望候静寛院宮御使おふち、一昨日京着と長谷新宰相ゟ承り申候、何分事柄ニ寄尽力も可致候得共、とふも唯御隠居斗ニ而ハ下官も周旋六ケ敷と存候、先日条城（二条城）江参り（太政官代）御本丸御殿へ上り拝見申候、城春草木深感慨無量、長局・小姓局・御膳所等其儘にして乱雑不可言、机鏡・立紙・徳利・諸道具見るに不可忍、堂上抔も被参候而、恥敷穴にも入度心中御察可被下候、色々申入度義海山と御坐候得共、書不尽言、大略報告如此、書外源蔵江申含候、時下為御家御自重専一ニ奉存候、下官之苦心御返翰をかくに臨み落涙数行、嗚呼之二字ニ付し候也

二月八日　　永

旧甲州室氏座下

朝夕も夜も涙にかきくれて君か御上のしたはるゝかな

一二月九日去る七日指出されたる願書に対して御指令あり、左の如し

越前宰相

北陸道先鋒出兵之儀ニ付、願之趣被聞召候間、尚追而可被仰付儀も可有之旨、御沙汰候事

二月九日

一二月十一日坊城殿より、来る十四日太政官代行幸之際、供奉被仰下候旨達せらる、如左

来十四日太政官代行幸可令供奉給之旨被仰下候、依而早々申入候也

二月十日　　俊政

追申、卯刻必無遅々可令参集給候也

別紙

一衣体・衣冠・着袴之事

一騎馬之事、口附両人

但拝借被願候輩者明十一日中に可被示候事

一主従弁当用意之事

一供侍四人或ハ両三人、下部三人

過日行幸之節、僮僕員数被申渡候条、違背之輩も有之候得共御宥免、今度於違背者屹度可被及御沙汰候、堅固可相守事

一二月十三日巳刻出門参官せらる、本日ハ都合ありて欠席せらるゝ筈なりしか、今朝林矢五郎・高木文平、徳川殿の謝罪状及ひ直書を携帯して着京（去る七日江戸出発）せし故、特に出仕せられしなり、此時太政官に於て、予しめ謝罪状を岩倉殿の内見に入れ、更に三条殿・岩倉殿列坐の席へ進達せられたり、謝罪状及ひ直書如左

謝罪状

慶喜相続已来乍不及、勤王之道心を尽し罷在候得共、菲才薄徳事々不行届、加之近日之事端奉驚宸襟候次第ニ立至り、深奉恐入候ニ付、謹慎罷在伏而奉仰朝裁候、此段御奏聞被（衍）被成下候様奉願候、以上

二月　　慶喜

〆

直書

先般憚朝憲退隠仕、相続之儀差極相願候義者家来共申立、其外無拠事情有之故相願候へ共、猶塾考候得者、右様之儀相願候而者深く恐入候儀ニ付、改而別紙之通相願候間、可然御周旋之程偏ニ御頼申候、以上

二月　　慶喜

大蔵大輔殿

副書

副啓、今度鎮撫使東下之由相聞候、自然関内江戸市中迄相越候様ニ而者、兼々鎮静方厚申付置候へ共、人心動揺、過激之輩如何様之義可相生哉も難斗、深く謹慎罷在候旨意を失ひ候様成行候而ハ、深奉恐悚候間、可相成ハ右鎮撫使東下之儀無之様御含之程御頼申候、以上

二月　　慶喜

大蔵大輔殿

一同時に林矢五郎より前橋侯の返翰、大久保一翁・勝安房の書翰を指出す（以上の書翰ハ戊辰日記に譲りて掲載せす）此日在福井茂昭公江、謝罪状到来、直に奏達せられし旨を被仰達、左の如し

急々一筆申入候、春寒難去候処、愈御清全珍重存候、抑去ル五日留守居西丸江呼出ニ相成罷出候処、徳川公御直書御渡ニ相成、林矢五郎去ル七日立、今十三日朝京着、御直書披見、右ハ御謝罪状ニ付直ニ今夕太政官江罷出（麻上下）三条大納言殿・岩倉右兵衛督殿江差出、両書御落手被致候、右御謝罪状別紙之通ニ候、此段念の為可申入、如此候也

二月十三日　　慶永

越前少将殿

尚々御謝罪状弐通并此書状、興之輔・家老・中老・側用人・中老見習・田内源介・十蔵・弥十郎・執法斗へ可示給、其余ハ禁漏達候也

一二月十四日例刻太政官へ出仕、夫より更に参内せらる、此日宮中

ニ於て、外国公使を京師江召喚、参内せしめ拝礼を許るさるゝ事に決せらる

一二月十五日徳川家より謝罪状を奏上せられたれハ、速ニ諸道之追討使を止められ度旨の建白書を指出さる、此建白書ハ徳大寺殿江直書を添へ為指遣はされたり、建白書・直書左の如し

建白書

徳川慶喜謝罪状指上候上ハ、此段速ニ天下へ御布告有之、早々諸道之追討使并諸藩之進軍を阻メ、蒼生之塗炭を被為救候義、今日之大御急務と奉存候、此義一日相後候へハ、天下一日之労費難算数名状儀ト奉存候、仰冀くハ今日大総督之御進発を被止候ハヽ、是亦生民之安堵如何斗ニ可有御坐候哉、無上之御仁政と奉存候、外国之御交際ニおゐてハ、昨夕已ニ御決定ニ而御安心之御儀と相成候得者、今日ハ内国ニおゐて差向候大議を建言仕候、幸ニ今日諸侯も参集之儀候得者、右止兵之大令を被発、好生之御仁恵を天下諸侯之民心へ洽くせられ、御一新之折柄、是迄凶器を被為動候ハ、実ニ不被為得止之御趣意たる事を御諭告御坐候ハヽ、騒然たる人心一定に帰し、沛然たる御徳沢皇国ニ充溢仕、万生至公之御新政を奉感戴、転凶為吉之好機会と奉存候へハ、当職ニおゐて至大至願奉存候、早急之御評議被為在候様仕度、此段謹而奏聞仕候、恐惶謹言

二月十五日　臣慶永

一同日例刻参内せらる、本日者在京諸侯一同参内被仰出、外国交際之義御布告あり、然るに公使江拝謁を許さるゝ事ハ後宮に異議ありて、当路之公卿方殊之外苦悩せられたれは、暮時前に至り慶永公岩倉殿と共に天前に伺候して、更ニ外国交際之要を詳悉明弁せられ、公退出後も岩倉殿ハ猶滞坐して御陳諍被申上、漸くにして拝礼をも許るさるゝ事に御一決ありしとそ、今夜御内儀より御膳部御酒を下賜せられたり

一二月十六日太政官に於て左之通仰付られ、中根雪江へも同様仰付られたり

越前宰相

今度外国人上京参内、右御用掛被仰付候事

一同日中山殿・正親町三条殿江書翰を遣はさる、昨日天前に於て、威厳を冒し奏言せられし御礼を申上られしなり、如左

一筆令啓上候、先以至尊益御機嫌能被為入奉恐悦候、抑昨十五日被為召ニ付、天前江罷出、臣慶永不顧恐惶干冒威厳、充分愚衷之趣奏聞仕、誠以戦寒之至、実ニ斧鉞之誅難遁奉恐入候、乍去臣子之愚意言上、実ニ謹畏本懐奉存候、御礼之儀天前宜御執成之程希上候也、恐惶謹言

二月十六日　慶永

中山殿
正親町三条殿

一同日林矢五郎を江戸に下し徳川殿江返翰を進せらる、此時尾・紀両家江御談の旨ありて、両家よりも重臣を江戸に下し、徳川殿御謝罪之儀を尚又周旋せらるゝ事となりし故、当時在江戸本多修理江、両家の重臣へも申談周旋すへき旨を達せられ、且万一修理帰京の途中にて出逢なは、更に江戸へ引戻す様通達すへき旨、矢五郎へ申含められたり、返翰如左

謹而奉言上候、去ル五日家来之者被召出御渡相成候御奏聞状、十三日朝上着、即夕直ニ太政官江罷出、総裁府江執奏仕、且御別紙之趣も具ニ三条大納言・岩倉右兵衛督迄申入候、此段奉言上候、尚委細之義ハ、家老本多修理ゟ奉言上筈ニ御座候也、誠恐誠惶、頓首々々、謹言

二月十六日第十二時　　慶永

一二月十八日夜に入りて徳川殿再度の謝罪状及ひ御家臣の歎願書到達す、去る十二日江戸城二ノ丸江知邸召喚、御目付妻木多宮より交附せしを御徒田村鐘太郎持参せしなり、本月十三日初度の謝罪状を奏達せられし已来、朝議未た其旨趣を容れられす、慶永公深く労神の折柄、再度の謝罪状到達して、慶喜公東叡山に入りて謹慎せらるゝ事となり、恭順の事実いよ〳〵顕著に至りしを以て大に力を得、明十九日直に奏上せらるゝ事に決せらる、斯て此謝罪状ハ奏達に先たち、其筋の内見に入れ置くへしとて、今夜毛受鹿之介・青山小三郎を三条殿・岩倉殿の許に差出されしか、岩倉殿ハ中山・正親町三条・徳大寺諸卿へも内見に入れ置かれ、然るへき旨指示されしを以て、此三卿へも十九日早朝鹿之介・小三郎を指出されき、謝罪状及ひ歎願書左の如し

此度御追討使御差向可被為在哉之趣、遥ニ奉承知誠ニ以驚入奉恐入候次第ニ御座候、右者全臣慶喜一身之不束より生候義ニ而、天怒ニ触候段一言之可申上様無御座次第ニ付、此上何様之御沙汰御座候共、聊無遺憾奉畏候所存ニ而東叡山江謹慎罷在、其段下々迄へも厚申諭シ、仮令官軍御差向御坐候共、不敬之義等毫末も不為仕心得ニ御坐候得共、弊国之義ハ四方之士民輻湊之土地にも御座候へハ、多数中ニハ万一心得違之者無之候とも難申、右辺ゟ恭順之意を不相弁、不慮之義等有之節ハ猶更奉恐入候而已ならす、億万之生霊塗炭之苦を蒙候様ニ而者、実以不忍次第、何卒官軍指向之義ハ暫時御猶予被成下、臣慶喜之一身を被罰、無罪之生民塗炭を免れ候様仕度、臣慶喜今日之懇願此事ニ御座候、右之趣厚御諒察被成下、前文之次第御聞届被為在候様奉歎願候、此段御奏聞被成下候様奉願候、以上

二月　　慶喜

御添書

本紙奉申上候京摂事件之節、詰合居候松平肥後并要路之役々同

様奉恐入候ニ付、御所置奉伺候心得ニ而為慎置候間、夫々御沙汰被成下候様奉願候、已上

二月　　徳川慶喜

御家臣歎願書

徳川慶喜家来共昧死恐惶奉哀訴闕下候、主人事兼々奉蒙非常之朝恩、深奉感戴候ニ付而者、別而皇国之御為日夜心力を尽し、既ニ祖宗伝来之政権奉帰、引続将軍職を辞退仕、弥以勉励罷在候処、先般京摂之事件遂ニ奉悩宸襟次第ニ立至り、於主人深奉恐入、東下以来只管恭順謹慎御沙汰奉窺候心得ニ而、上野寺中ニ退蟄罷在、其節詰合候要路之者共ハ為慎置、御所置奉待候事ニ御座候、抑京摂之事件主人ニ於テハ深奉恐入居候得共、右者全鎮撫方不行届より相生候義ニ而、其胸中を推察仕候へハ、臣子之分実以悲泣之至、片時も不安次第ニ御座候、主人事元来皇国之御為一点之私を不挟、忠誠之外二念無之段者厚く御諒察被成下、且祖先之勲労を被思召、出格外寛大之御沙汰幾重ニも奉歎願候

二月　　徳川慶喜家来中

一二月十九日朝四時出門衣冠参内せらる、慶喜公の謝罪状を奏達せらるゝためなり、宮中に於て中山殿江御逢、昨夜到達之書類を差出たし（御家臣の歎願書ハ指出されす）尚又恭順謹慎之実効顕著の上ハ、速に寛大の御処置在らせらるゝ様にと歎願せられしに、中山殿厚く領承、早々天意を伺ふへしと答へられたり、夫より太政官江出仕、同所にて把筆、慶喜伏罪之上ハ速ニ征東軍を止められたき旨の建白書を差出さる、左の如し

臣慶永謹而奉言上候、今般慶喜伏罪之上東叡山江閉居謹慎罷在、会・桑初夫々所置申付奉仰勅裁候、謝罪状者既ニ今朝慶永参内、中山前大納言江奏達仕候事ニ御坐候、抑於慶喜ハ実ニ謹慎之実効著然いたし、此上ハ於朝廷速ニ征東之進軍被為止、行幸も被為止候而、以天下公議慶喜江之御所置并会・桑始江之被仰付、至当不可動之朝裁早々被為在度奉存候、慶喜伏罪謹慎夫々所置仕候而も、矢張御進軍行幸等も依然御施行被為在候而ハ、天下之人心生疑懼、於朝廷被為好事候様ニ相当り、且為朝廷国々疲弊を極め、怨嗟之声満行路、遂ニ者乍恐奉怨朝廷候様之形勢ニ立至り可申ハ必然と奉存候、慶喜伏罪謹慎無之候得ハ、天下困弊候とも決而聊朝廷之御無理とハ不奉存、各藩進軍実ニ干城勤王之誠赤可顕候、利害を以言上仕候へハ慶喜如此閉蟄謹慎罷在候ニ、尚御進軍被為在候へハ、慶喜家来過激之者万一忿怒ニ堪兼候所ゟ幾千人一心と相成、前日ゟハ必死之兵と相成可申、乍恐官軍ニ而ハ諸藩入交り之兵隊ニ而、百人百心千人千心之景況、此者共慶喜伏罪謹慎承知仕候得者、猶以鋭気滅却可仕、勝敗之上ニ至り候而も、乍恐如何可有之哉、其上客戦主戦之勢も有之者必然と奉存候、王師実ニ万一勝利なき時ハ、天下是限りと奉

憂悩候、何分早々被為止御進軍、公平之御所置奉願候、且又今般外国御交際之上ニ付而も、今度之御所置万一公法被為誤候而ハ、実ニ御大事と奉存上候、兼而申上奉り候通り、外国ハ当今条理分明、公法を以所分仕候、伏罪謹慎之上ニも猶御征東と申儀、外国人如何論し可申哉、彼も此度之御一所置を以、今後之天下御政道可推知奉存候、臣慶永徳川支族之身を離れ、当職之任を以奉言上候、万一矢張御進軍行幸之御大挙等被為在候ヘハ、乍恐天下人心之向背ニ関係し、今後之御大政先見仕候ヘハ可相分候、右故公平至当之御所置ニ出候ヘハ、皇徳天下ニ輝キ、朝威率浜ニ光被し、億万之生霊不啻免塗炭、諸侯も亦感戴聖恩、治安再太平之天日を観可申と奉謹畏候、外国人も頗皇政一新之公法を以被為裁儀候ハヽ、海外之賞誉勿論と奉存候、臣慶永忘狂瞽僭越、干冒尊厳以身奉言上候、臣当死罪謹而待斧鉞、万一御採用被成下候得者、天下幸甚之至奉存候、臣慶永誠恐誠惶、頓首々々、再拝謹上

二月十九日　　臣慶永

一同日太政官ニ於て総裁宮ゟ左之通御直達有之

越前宰相

議定職内国事務局輔被仰出候事

慶応四年二月　　総裁□

一同日行幸奉行坊城殿より左之通り達せらる

為御親征大坂行幸供奉先鋒被仰出候事

日時并御道筋等追而可申入候事

二月　　行幸奉行俊政

越前宰相殿

一二月廿日江戸江飛脚差立、徳川殿江返翰を呈せらる、左の如し

謹而奉言上候、去る十二日家来之者西御丸江御呼出ニ而、妻木多宮ゟ御渡相成候御封物、以急飛指越、去ル十八日晩到着、右ハ東叡山江御謹慎被為成候御謝罪状、昨十九日慶永参朝、議定中山大納言迄奏達仕候処、落手之旨申聞候、依之此段謹而奉言上候、誠惶誠恐、頓首々々、百拝謹言

二月廿日　　慶永

一二月廿一日依召参内せらる、此日過日来執奏せられたる徳川殿謝罪の件ハ、東征大総督の手を経由すへき筈の旨、虎の間ニ於て中山・徳大寺両卿より勅答在らせられたり、さて此件ハ先般岩倉殿より内諭の次第ありしより、追々関東江周旋の労を執られたる事にて、今更大惣督の手を経由すへしとある事ハ、頗る案外之儀にて当惑せられけれと、此期となりては他にいかにともなされかたなかりし故、更に御徒田村鐘太郎に急飛脚を被命、田安中納言殿迄其段を仰進せられたり、勅答書及ひ田安殿江進せられし書翰左

の如し

勅答

慶喜謝罪之状、東征大惣督を被置候上ハ、右手ヲ経スシテ言上之儀ハ難被聞召筋ニ付、宜其順序ヲ以執奏有之候ハヽ、思召之旨可被仰出候事

〆

田安殿江進せられし書翰

以急飛啓上仕候、春暖相催候処、先以徳川公御謹慎中何等之御障動も不被為在候哉、不堪案労奉存候、随而貴卿愈御清安珍重奉存候、抑召ニより今廿一日午後慶永参朝之処、中山大納言・徳大寺中納言両卿御対面ニ而、別紙之通り勅答有之候、依之別紙差上候間、夫々其筋へ御指出有之、右ニ付而者従其表重き御役人、東征大総督帥宮御陣江二月十二日御渡之御謝罪状、同御趣意ニ而御指出可有之、至急之儀故老中始被仰談、御取計一刻も早く奉希候、此段為可申入如此御座候、恐惶謹言

二月廿一日第七字　　慶永

田安中納言殿

一同時大久保一翁江遣ハされし内書如左

以急飛令啓上候、扨者昨日同役徳大寺大納言殿ゟ紙面を以今日参朝之義申来候故、今廿一日午後参内仕候処、於虎之間勅答有之、右御書者田安中納言殿へ以直書差出候、御評議有之義と奉存候、中山・徳大寺両卿へ尚又申談候処、何分御謝罪状ハ、東征大総督帥宮御陣江被指出候様いたし度と被申聞候間、此段申進候、何レ早々重き御人帥宮御陣へ御差出可被成候、去ル十二日妻木田宮ゟ小生家来へ被相渡候御封書中、御謝罪御同趣ニ而宜候、尤進軍追々被為在候而者過激之者万一之義有之候而者恐入候故、御止り之儀先日従徳川公被仰遣、右御趣意も被仰立相成候而宜哉と奉存候、下官も建白いたし候へ共、更ニ貫徹不仕候、右者下官愚昧不行届所ゟ所致にして甚以恐入申候、此程中風邪押而日々官代江出勤之仕合、心中偏ニ御恕察可被下候、且又家来当時徴士毛受鹿之介ゟ一封差出候間、御落手可被下候、委細鹿之介書状中認有之候、且又心付之義ハ幸徳川公御実家水府トハ有栖川御近親にも被為在候故、何卒水府公并御実母源烈公簾中貞芳院殿ゟも、別段御謝罪帥宮御陣江水府ゟ内々家来等被指出、徳川公御恭順思召之処被仰上、御近親之処を以て御すかり御依頼被為在候而ハ如何哉と奉存候、表向御謝罪状重き御人ニ而帥宮御陣江差出候とハ別物ニ而候、尚又従静寛院宮者、帥宮御陣江御文なり御人なり或は御文を御使ニ而被遣候歟、是非御懇願被為在候義至当と奉存候、尚又愚衷之趣も十分申述候間、宜御勘考、至当之御取計為宗家奉至願候、書余期後音候、取込用事而已早々申入候也

二月廿一日第七字　　慶永

大久保一翁殿

一同日酒井与三左衛門を尾藩田宮如雲の許に遣はさる、徳川殿より謝罪状進奏之事を尾老侯江も倚頼ありし由故、右謝罪状を尾侯より直に大惣督府江進達ある様被成度段仰せ入らるゝためなり、此時田宮速に其意を領し、直に名護屋江可申上旨返答せり

一二月廿二日例刻太政官江出仕、退出より土老侯旅館を訪問せらる、徳川殿謝罪に関する昨日来之次第を物語られ、尚今後の御周旋方を御相談ありしなり

一二月廿六日直衣着用を勅許せらる、本日夜に入勘解由小路資生殿御捻文を以て申遣ハされしなり、如左

国家多難之折柄、頃日以来励精以格別思召被聴直衣之事

御捻文

追上啓仰詞一紙令進入候也

着直衣令参内給之旨被仰下珍重存候、仍申入候也、恐惶謹言

二月廿六日　　資生

越前宰相殿

一同日夜に入、毛受鹿之介を前橋藩山田太郎左衛門の許に遣ハさる、是ハ鹿之介本日山田の旅宿を尋ねし時、前橋侯上京途中勢州関駅にて大総督宮より俄に召させられ、更に東方江引返さるゝ事になれるよし物語りし故、帰邸其趣を申上しに、慶永公徳川殿謝罪の件ニ付、此程勅答の御次第有之折柄なるに、前橋家の督府より召させられしハ幸の事なれハ、拝謁の折を以て謝罪筋の歎願に厚く尽力ありて然るへけれハ、其事を尚又山田に相談すへしとありて、再ひ鹿之介を遣ハされしなり

一二月廿七日前橋侯東海道旅行中江飛信を発せらる、如左

一筆致啓上候、春寒去兼候得共、先以貴君愈御清安被成御座、御旅程無御障と奉恐賀候、扨者昨日も御家老山田太郎左衛門弊邸へ罷出、小生家老へ段々之事情申聞、委細相伺申候、不容易於江戸表御尽力実以感服奉依頼候、右ニ付而ハ愚衷之趣縷々太郎左衛門迄申遣候間、同人ゟ早々可申上候、何分にも貴君にハ大惣督へ被為入、御謝罪状御差出、十分御尽力被成候様奉希候、右之段早々得貴意度如此御座候、恐々謹言

二月　　慶永

前橋少将殿

一二月廿八日依例太政官江出仕せられしか、本日ハ在京諸侯一同を召されたれは、更に参内衣冠せられたり、さて於御学問所謁見聖諭の御書付拝見、畢て小御所に於て酒饌下賜、夜ニ更退朝せらる、聖諭御書付如左

朕夙天位を継き今日天下一新之運ニ膺、文武一途親裁を以万機

を断決す、国威之立不立、蒼生之安不安、朕か天職を尽不尽ニ有れハ、日夜不安、寝食甚心志を労す、朕不肖と雖列聖之余業、先帝之遺意を継述し、内ハ列藩万姓を撫安し、外ハ国威を海外ニ耀さむ事を欲す、然ルニ徳川慶喜不軌を謀り、天下遂乃騒擾、万民塗炭ニ陥とす、故朕不得止断然親征之議を決せり、尚已ニ布告せし通り、外国交際も有之上ハ、将来之所置尤重大ニ付、天下之為ニおゐてハ、形勢ニより万里之波濤を凌き、身を以艱苦ニ当り、国威を海外ニ及し、祖宗先帝之霊ニ対んとす、汝列藩朕か不逮を佐け、同心協力せよ

一同日伊藤友四郎江戸より帰着す、去る七日本多修理に従ひ京都を発し、其後江戸に着本多ハ十三日伊藤ハ十六日して携帯せし所用を畢へ帰京の途に就本多ハ廿一日伊藤ハ廿二日きしに、林矢五郎を以て本多に更に江戸に於て周旋する所あるへし、若帰京の途に上るも直に引戻すへしと伝へしめられし故、本多ハ由井駅より引返し、再ひ江戸に赴き、伊藤ハ江戸の事情を申上るため其まゝ帰京せしなり

一二月廿九日稲葉美濃守殿の旅中へ飛信を発せらる、昨日伊藤友四郎帰京の便にて稲葉殿、徳川殿の謝罪を申立らるゝため上京せらるへきよし聞かれし故なり、左の如し

以急飛令啓上候、春暖之砌、先以愈御清全珍重存候、抑今般貴所様老中被免候上、徳川公御謝罪之為御上京之由、浅野美作守初ゟ申越候、右者貴所様御京着御謝罪状被指出候而も、大惣督宮有栖川帥宮已ニ御発行済之事故於御所御受取ハ無之哉と被考申候、其子細ハ先日従徳川公之御謝罪状、即慶永参内、中山前大納言迄指出候処、其後別紙之通御達ニ而、何分従江戸表御人を以、御謝罪状大惣督宮御陣営迄被指出候様にとの儀ニ御坐候、此段ハ従慶永田安中納言江以直書申遣候間、定而江戸より貴所様へも御申達相成居候事と存候、たとひ江戸ゟ不被申越候とも、貴所様御謝罪状御指参ニ而、一刻も早く大惣督宮陣営へ御参上ニ而、御差出被成候様致度候、且又貴所様御上京之義ハ、大惣督宮江御伺被成候様致度候、為御心得去ル廿一日慶永江従朝廷御渡相成候書付入御披見候、仍早々以急飛申入候也、恐々謹言

二月廿九日　　慶永

淀侍従殿

副啓申入候、扨者貴所様京都近く御旅行被成候而も、大惣督宮御陣営之処迄御引戻し被成候而御謝罪状御指出可被成候、此段為念申進候也

二月廿九日　　慶永

淀侍従殿

右之飛信者、三月七日飛脚之者東海道小田原宿にて稲葉殿に出逢、同所紹太寺御旅宿中江達せしより

一二月晦日朝参内、本日ハ仏・英・蘭三国の公使参内、拝礼の事あ

り、午後第一時仏・蘭の公使ハ参内、拝礼を竟へしも、英公使ハ途中行兇人ありて、其従騎数名に傷つけたるため、参内するを得す旅館江引戻せし故、外国掛り山階宮・東久世殿・宇和島殿、内国掛り徳大寺殿と共に旅館を訪問せらしなり（れ脱）

一三月朔日例刻太政官江出仕せらる、昨英公使参朝の途中行兇人ありて、其従騎に傷を負ハせ、本日政府より謝状を公使に贈られし故、慶永公にも謝状に署名せられたり、謝状左の如し

昨二月晦日閣下参朝之途中、大和之産三枝蓊・城州桂村之産朱雀操、意外之暴行ニ及、貴国之兵士数人ニ手を負せ候次第ニ相運ひ候処、幸附添之者より壱人ハ打留、壱人ハ召捕候段申出候、国之政府ニ於ては専ら外国交際を重し、普く親睦を厚ふせんか為、参朝も申入候儀ハ兼々御諒察之通ニ候処、頃日ニ至り右様之所業数々有之候者、必竟我々政府不行届より生候次第、各国に対し実以汗背心外之至ニ候、勿論右ハ余類之者有無精々探索を尽し、何処迄も根を可断候、又召捕候三枝蓊者両国政府之重大之礼式を妨け、不届至極ニ付厳科ニ可処ハ勿論之事ニ候、且又貴国之兵士手負之者治療不相届、終及死亡候歟、又ハ是よりして職掌に離れ活計を失ふ時ハ、我政府より至当之養育料を与へて、忿恚之一端を慰し申度候ハ我政府之実意ニ候間、此段貴国兵士ハ勿論、本国政府江も厚意貫徹候様、以書面可申入旨朝令有之ニ付、此段如斯御座候、以上

三月一日　　三条大納言
　　岩倉右兵衛督
　　徳大寺大納言
　　越前宰相

一三月三日太政官出仕例之如し、此日英国公使参朝、拝礼あり

一三月十日岩倉殿江内書を遣はさる、去る四日江戸出立之飛脚今夕着、在江戸本多修理より慶喜公御恭順之筋愈御行届、大惣督宮本営江謝罪使として、一橋殿発途あるへきに決したれとも、過日謝罪状進達之為め出発せられし淀侯、三島駅にて薩州先鋒より懸念の旨あり、小田原駅に退き同処太紹寺（紹太寺）に滞留、殆んと潜居之体にて未た謝罪状を督府に進達せられす、日光宮より仰遣ハされし旨ありしため、官軍未た箱根以東へハ進軍に至らされと、斥候と称して追々に東下する人数ハ、尠少ならさるよし、目下江戸方ハ鎮静勿論なから、いよ〳〵謝罪状を其筋江進達するを得す、征東軍追々江戸接近之地江進めらるゝに於ては、如何なる変状を見るニ至るへきか難計、甚危殆之景況にて心痛至極之旨、縷々申来りし故、慶永公以の外御労神、夜に入り内書を遣はされしなり、此時本多より遣はせる内状をも添へられたり（此内状散逸して見あたらす）

一筆致啓上候、先以愈御安全、被成御勤務奉敬賀候、陳者唯今江戸表ゟ急飛脚到来、家来之者より別紙之通申越、誠以驚愕之

至、皇国之御大事実ニ旦夕ニ切迫し奉恐入候、為皇国伏冀くハ、唯今ゟ早々御手を被附、先以御進軍御指留、謝罪状御取揚ニ相成候様、迅速被仰付候半而ハ、実ニ危急無此上儀と奉存候、何分今夜中にも御発令之程、為天下奉仰願候、猶外ニ申越候儀も御座候へハ、委細者明朝貴宅へ参上可及面罄、至急之条而已拝啓仕候、恐惶謹言

三月十日　　慶永

右兵衛督殿

右御即答如左

令謹承候、先以弥御安泰欣然候、陳ハ江戸表ゟ急飛御到来之旨ニ而本紙拝見、且段々示諭之条々御心中一々恐察候、乍然決而深く御配慮之筋ハ有之間敷哉、三道之進軍着府之事ハ、素より今日に至り不得止か、亦謝罪之道不立筋毛頭無之事とかね〳〵愚慮候、乍併惣督江凡而不通と申事ハ頗如何之事と存候、右等ハ速ニ勘弁可仕候、何分にも春来御内話も有之事、於臣者聊存込之義も有之、総督ゟ決極ハ御伺出ニ相成筈ニ付、戦争ニさへ不相成候得ハ、必御配慮之筋ハ無之哉と存候、右ニ付明日来臨之事ハ御断申入候、尚明後日拝上、万々可申承候、仍早々御請迄、如此候也

三月十日　御受　　具視

尚々此御報旨趣ハ尊卿限り、必御洩し無之様、御覧後早々御火中可給候也

一三月十一日三条・岩倉両卿江書翰を遣ハさる、是ハ今朝中根雪江を岩倉卿の許に遣ハし、昨日御内見に入れし東報の如く、御先鋒江戸府内へ打入ともならは、不逞の徒或ハ暴動に及ふ事もあるへきか、さてハ事の破れとなり、最早太平の命脉ハ絶果へし、されハ此際進軍を止めらるゝか、又ハ梱外ハ御委任の事故御掣肘なされかたしとならは、速ニ公議に附して進止を決せらるゝか、至急何分の御詮議ありたしとの旨趣を陳白せしめられしに、卿、慶喜形の如く恭順の上、大久保・勝の周旋も行届くよしなれ者、決して暴動に及ふ様の気遣ハ無用なるへし、果して其如くなれハ、官軍よりも強て兵端を開らく事ハあらさるへしとありて、陳白の旨趣を承引せられさりし故、中根更に此頃英公使に対して暴動に及ひし如く、事若意料外に発せんには、大久保・勝といへとも如何とも為す能ハさるへしと申上しかは、卿少しく御落意ありて、只今より三条卿の許に赴くへけれハ、両途の内何とか相談すへし、宮へ御委任とハ申すものゝ、結局の御処置ハ無論伺ひ出らるへき筈なれ者、尚屹度心得置くへしと答へられし故、中根帰邸して右の趣を申上しか、さらはとて更に両卿へ書翰を呈せらるゝ事となりしなり、如左

一翰啓上仕候、春暖之砌、先以両卿愈御清安奉謹賀候、抑今朝中根雪江差出、愚意之趣為申上候処、段々御懇情御返答之趣雪江罷帰申聞、謹畏奉存候、何分至急之義、一刻も早ふ御決議奉

至願度、幸只今両卿御参会之事にも被為在候故、御相談被決候様奉企望候、此段早々及言上候也、恐惶謹言

三月十一日　　慶永

三条大納言殿

岩倉右兵衛督殿

一三月十二日太政官出仕如例、此日岩倉殿御面談ありしハ、一昨日御申立之御次第ハ、三条卿御相談之上、御先手にて謝罪之旨趣を壅蔽する事のなき様、昨夜急飛を以元帥府へ通達に及ひたり、今一条進軍を見合ハす事ハ、梱外之事故此方にてハ計らひかたし云々なりし

一三月十四日参内せらる、本日者在京官武諸家一同辰半刻参内仰出されしなり、於宮中五条の御誓文并に宸翰を拝見せしめらる（御誓文并に宸翰ハ人々の知る如くなれハ掲記せす）

一同日本多修理江戸より帰着す、修理東下中江戸に於て周旋せし大略ハ、最初慶喜公より差出されし奏聞状（一月廿五日西丸に交附せられしものにて、慶喜公退隠、紀伊中納言江相続の奏聞なり）を返上して、恭順謝罪の必用を陳弁し、恭順謝罪の趣意徳川殿にて一決、共御使を淀侯に被命し故、事情復命のため一応帰京の途に就きしに、東海道由井駅にて林矢五郎に逢ひ、更に江戸に下り周旋する所あるへき旨の再命に接し、夫より引戻し、江戸に於て尾・紀両藩重臣申談し、謝罪実効之事件を周旋し、一橋殿に謝罪使を命せられ、已に出発せらるゝ事となりし故、去る七日江戸を発して今朝未明着邸せしなり

一三月十六日林矢五郎江戸より帰京す

一三月十八日御親征行幸の供奉を免せらる、来る廿一日御発輦の御予定なりしか、慶永公過日来所労、太政官之出仕も御理り勝に過させられし折故、三条殿・徳大寺両卿江御内談之上御辞退ありしなり、如左

今般御親征行幸被仰出候ニ付、慶永蒙供奉之命武門之冥加、無此上深畏入奉存候、然ル処過日来所労罷在、騎馬難堪、依之重畳奉恐入候得共、先陣供奉被免度奉願候、且又御警衛人数ハ差出、御親征御用相勤度、此段も奉願候也

三月十八日　　慶永

坊城頭弁殿

即日御指令

御親征行幸供奉、依所労理被聞食候、仍早々申入候也

三月十八日　　俊政

越前宰相殿

一三月十九日参内せらる、今日立大后宣下ニ付、御祝儀を申上られ

しなり、夫より太政官代江出仕せらる

一三月廿日在京公卿・諸侯一同参内仰出さる、慶永公所労参内せられす、本日参内の輩江達せられし御書付左の如し

徳川慶喜御処分之儀、於朝廷者諸事御寛容ニ被思召、御沙汰被仰出候処、旧冬鎮定を名とし下坂之上軍配ニ及候次第、始終立行相違、正月三日已来之挙動叛逆顕然、其罪天下万民之共に知る所ニ候故、不被為得止大号令御発表、終ニ御英断を以御親征被仰出候、勤王之諸藩私情を捨て、公義ニ基き諸兵大惣督ニ附属し、已ニ賊城に相臨み候折柄、恭順謝罪之実効も更に無之、尚先供之行違等を口実といたし、停軍相願候次第、朝廷を奉軽蔑候所為ニ而不届之至ニ候、天下後世ニ対し決而御許容難被遊儀ニ可有之、仮令御許容被為在候而も、亦前条暴入之轍ニ出候哉も難計、御御（衍）条理上ハ勿論、彼之情実万々御採用難被成、却而人心之疑惑を生し候而も、此御場合不容易儀ニ付、大義名分篤与勘弁いたし、以来私ニ文通等之義於有之者、逆徒ニ均しき筋ニ付、屹度御沙汰可有之候事

三月

一三月廿一日暁丑半刻御出輦、浪華江行幸せらる、徳川慶喜御親征のためなり、慶永公所労参内せられす

一三月廿五日太政官江出仕せらる、此程来所労引続き欠席せられしか、本日ハ出仕せられたり、此日浪華行幸中御警衛願を差出さる、如左

慶永過日来所労罷在、騎馬難堪ニ付、供奉被免度奉願候処、願之通被仰出奉謹畏候、其節御警衛人数差出度旨願之通被仰出重畳奉畏候、依之何卒少分之人数ニハ候得共、於浪華行在中御警衛場処、又ハ市中巡邏何方成共御遣立被成下候様奉願候也

三月廿五日　慶永

一三月廿六日岩倉・東久世両卿来邸せらる、慶永公久々所労、出仕せられさりし故、御見舞として訪問せられしなり、御居間に於て小酌、種々御談論、二更後退散せられたり

一三月廿八日太政官に於て左之通達せらる

越前宰相

民政租税宿駅掛被仰付候事

一三月廿九日左之通仰出さる

越前

行在中、西北柵門御警衛被仰付候条、御沙汰候事

三月廿九日

一三月晦日頒暦の制を定められ度旨上書せらる、如左

暦法之儀ハ誠ニ以日用不可闕之者にして、別而民政之第一と奉存候、是迄於徳川浅草天文台取建、製暦仕来り申候、然ル処王政御一新ニ付而者、暦法製造所并天文台早々御取建相成、従来年者従朝廷天下江被為頒賜候様仕度候、以上

三月晦日　　慶永